帝國實業讀本

改制新版

卷六

375.9
Ha7
資料室

42487
教科書文庫
4
810
44-1938
20000
35910

資料室
395.9
Ha7

千早ぶる　やまと
神の代より
日の本の
國のつくりしめし
立てるこの山

文部省檢定濟
昭和十三年一月十一日　實業學校國語科用

帝國實業讀本

改制新版

文學博士　芳賀矢一
文學博士　上田萬年
文學士　長谷川福平　訂補　編

合資會社　冨山房發兌

蒙古襲來　筆　岡本豊彦

廣島大學圖書之印

廣島大学
教
35910
図書

帝國實業讀本 改制新版 卷六

目次

一 野邊の秋風(古歌)……一
二 三つの眺……三
日本帝國の古名(自修文)……一〇
三 夜叉王(脚本)……岡本綺堂……一四
四 樹の根……和辻哲郎……二六
五 潮待つ間……幸田露伴……三四
六 鈍と根……永井潛……三七
七 ジョン・ウナメーカー……郡山幸男……四二
白銅の光(自修文)……岡本綺堂……五三

八　菊(詩)……中西悟堂…六〇
九　空行く雁……(異本曾我物語)…六二
一〇　武藏野……國木田獨歩…六六
一一　今昔さまゞ……石井滿…七四
自製の英雄たれ(自修文)……津村秀松…八四
一二　冬の山里(古歌)……九〇
一三　吉野の行宮……北畠親房…九三
一四　最後の參內……(太平記)…九七
一五　國難と皇室……渡邊幾治郎…一〇一
一六　自ら助くる者……永田秀次郎…一〇六
一七　毀譽……三浦梅園…一一五
一八　明淨直その一……五十嵐力…一二〇
一九　明淨直その二……五十嵐力…一二三

光明を尙ぶ精神(自修文)……清原貞雄…一二九
二〇　那須の與一の事……(平家物語)…一三五
二一　仁は心のいのち……室鳩巢…一四〇
二二　國威八紘に振ふ……高島米峯…一四五
我等は若い……一四五
人生の一樂……一四六
國民の富は國家の富……一四八
國威八紘に振ふ……一四九

廣島大學圖書之印

帝國實業讀本 改制新版 卷六

一 野邊の秋風

夕されば野邊の秋かぜ身にしみて　藤原俊成[一]
うづら鳴くなりふか草の里[二]

ものゝふの草むすかばね年ふりて　加藤宇萬伎[三]
あき風さむしきちかうが原[四]

水の面にてる月なみをかぞふれば　源順[五]
こよひぞ秋のもなかなりける

(一)鎌倉時代の歌人。千載集の撰者。元久元年(一八六四)歿、年九十一。
(二)今の京都市伏見區深草。
(三)江戸時代の國學者。靜廼舍と號した。江戸の人。安永六年(一七七八)歿、年十三。
(四)桔梗ヶ原。今長野縣松本市南方の原。天文二十二年(一五五三)武田信玄が小笠原長時と此所で戰つて大勝を得た。
(五)平安時代の歌人。また詩文をも善くした。永觀元年(一六四三)歿、年七十三。

(一)鎌倉時代の人。四位少將。參議藤原資房の男。

(二)長野縣東筑摩郡。歌枕として古來名高い。

はるのはてさくらたにまた散のこる此春をいくかもなしと誰かいふらむ　眞淵

藤原家隆

した紅葉かつ散る山のゆふ時雨
ぬれてやひとり鹿の鳴くらん

藤原資宗(一)

いかだしよ待てことはん水上は
いかばかり吹く山のあらしぞ

賀茂眞淵

信濃なるすがの(二)荒野をとぶわしの
つばさもたわに吹くあらしかな

賀茂眞淵筆蹟

煌々

群陰皆影を伏す

有象無象

詩的情緒

二　三つの眺

高原

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として、仰いで見る事も出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪のは萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴なはない清涼の光である。皎潔、無垢、崇美と稱ふべき優しい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的

情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つてゐる熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の、人の胸懷に浸みわたる事は、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。(一)「うちむかふ月は一つの影ながらうかぶは千千の思なりけり」である。

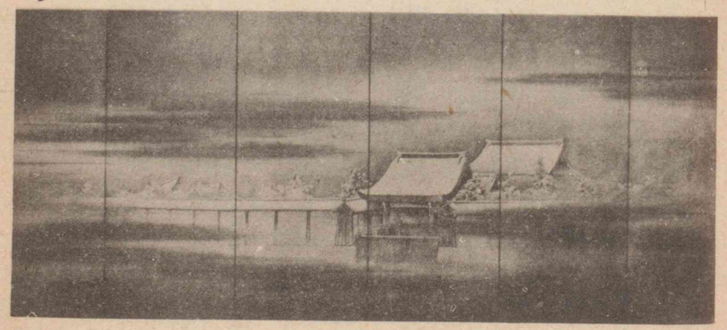
東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち滿ちてゐる。天文學者は言ふ、「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である」と。この冷たい光が、古往今來どれ程の暖かみを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を

(一)賀茂眞淵の門人荷田蒼生子の歌。

嗟歎
感吟
古往今來

以て乾坤を一つにする事は、月に似た點が多い。高樓、茅屋も皆同じ色に埋められる。(一)「花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪降るみ吉野の山」といふやうに、眼に入る物、悉くその下に包まれてしまふ。(二)「三千世界銀成色。十二樓臺玉作層。」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏にあるの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感じられるのである。霏々と散り、紛紛と飛んで、唯一條の川水を殘して、山と言はず、野と言はず、瞬くうちに瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめるのである。



京都皇宮の雪（前田玉華筆）

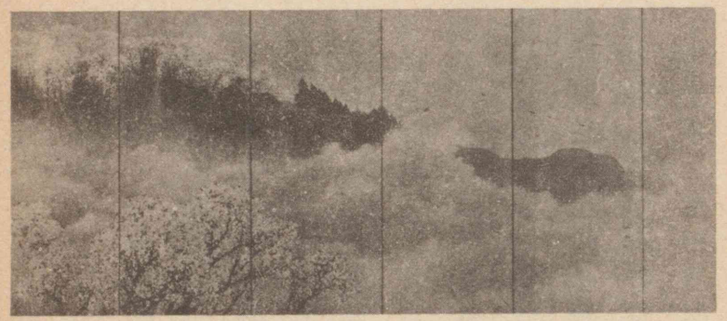
(一)新續古今集、僧仙覺の歌。
(二)唐の詩人白樂天の詩句。

乾坤を一つにする
廣寒宮
瓊玉を敷く

對照の妙
造化の巧

よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々な眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中蓮の花の咲いてゐる極樂淨土は、決して我等の世界程樂しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花の樣々、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへもつてゐる。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へてゐる。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは



花ぐもり（菊池芳文筆）

無理はないが、山の花、野の花、何れも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれ程寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を愼んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花とは緣が切れないのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その淸淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今の詩歌は擧げるだけ愚か

(一)「年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見ればものおもひもなし」(古今集、藤原良房)

(二)新古今集、康資王の母の歌。

(三)古今集、清原深養父の歌。

(四)謠曲「葛城」の句。

である。余は唯「花をし見ればものおもひもなし」といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる

月雪花三つの眺には各その特長がある。何れを前、何れを後と言ふ事は出來ぬ。

やまざくら花の下風吹きにけり
木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

冬ながら空より花の散りくるは
雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花に譬へたのである。

笠は重し吳山の雪。鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。

ガス(瓦斯)
不夜城の觀
天與の幸福

(一)伊藤仁齋の歌。

(二)唐の宋之問の詩句。

花を賞して月を愛せぬ人はない。月、花を愛して雪を賞せぬ人もない。思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉されてゐる極北の國では、氷は卽ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を樂しましめる物もない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見た事がない。ガス、電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見る事が出來ない。我等日本人の、昔も今もこの三つの眺を擅にする事を得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は古人の歷史が加つて一層の感興が增す。「世々を經てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月」月は古來の歷史を照す鏡である。「年年歲歲花相似、歲歲年年人不同」人生の感は花を見て益〻繁く、雪を見て愈〻多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有

し得た我等祖先の遺蹟は、いかに多くの感興を我等に傳へたるよ。いかに多くの追慕を我等に催さしむるよ。

豐饒　食物の澤山あること。

(一)六二五年。
(二)大阪市住吉區。
(三)不詳。

自修文

日本帝國の古名

豐葦原の千五百秋の瑞穗國といふ古名は、我が國の土地の豐饒で、秋には米穀の豐かである事を賞め稱へたのである。葦原といふのに、まだ開拓しない地には、到る所葦が茂つて居つた有樣が窺はれる。それを次第に開拓し、開墾して、垂穗の稻の豐熟するやうにしたのは、上代國民の努力によつたのである。皇室に於ても常にこれを奬勵し、保護し、これに御心をそゝがせられた事は、歷史に明記されてゐるところである。

崇神天皇の六十二年の詔に、「農は天下の大本なり。民の恃んで生くるところなり」と仰せられて、依網池、苅坂池を作らせられた事が見え、垂仁天皇の三十五年に高石池、茅渟池、狹城池、迹見池を始めとして、諸國に八百許の池を作らせられた事が見える。仁德天皇の十四年には大溝を掘り石川の水を引いて、鈴鹿、豐浦の郊原に灌漑して、四萬餘頃の田を得たとある。後には池溝を掘る爲に、三韓の歸化人を使用された事もある。また雄略天皇の御代には諸國に桑を植ゑさせられ、皇后も蠶事を親らなされたのである。かやうに農事を御奬勵あそばされたので、耕地は年々に開けて、五穀もよく實のり、國民は鼓腹して、太平を樂しんだのである。

次に大八洲國といふのは、諸冊二尊が最初にお產みになつた八つの大島から附いた名であるが、これも今日の意味で考へれば、この八大島が最も早く開けたと言ふのであらう。その後開けた島にはもつと大きいのもあり、近年になつては臺灣島及び澎湖島の全部、樺太島の半分、また朝鮮の全部も我が帝國の版圖に入つたから、建國の昔を思へば、國土の延長は比較にならぬ。

(一)六六六年。
(二)大阪府(和泉國)泉北郡高石町。
(三)同府(同國)泉南郡佐野村の北。
(四)奈良縣生駒郡都跡村。
(五)同郡片桐村。
(六)九八六年。
(七)大阪府(河內國)中河內郡。
(八)同府(同國)南河內郡。
四萬餘頃　頃は面積百畝のこと。
鼓腹する　食足つて滿足してゐる。
(九)伊弉諾尊と伊弉冊尊。

細戈千足國といふ古名もあつた。これには二つの解釋がある。一つは、細戈はよい矛の意味で、千足は十分に備つてゐる意味、即ち武器も充實してゐる武勇の國といふ意になる。一つは、細戈を枕詞と見て、矛には千といふ物があるから、唯千足と言ふ意味で、萬づ不足のないよい國と言ふのである。近代の學者は大抵第二の說に贊成してゐる。

浦安國とも言つた。平穩安樂の國の意である。

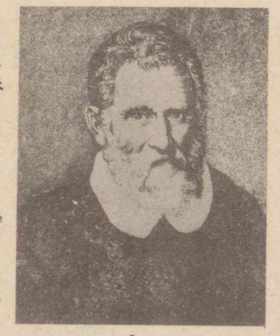
やまとの國と言ふのは、上代は大和國に都せられたので、天皇のいらせられる國の名を貴んで、それを全國におほせて、やまとの國と言ひ、またおほやまととも言つたのである。後に日本といふ漢字をあてゝ日本をもやまとと訓んだので、日本武尊をやまとたけるのみことと訓んだのでもわかる。

敷島と言ふのも、(一)欽明天皇が大和國磯城郡磯城島に都せられたから、その都の名を大和國の枕詞にして「敷島の大和の國」と言ひ、やまとが全國の名となつたから、敷島が即ち日本國といふ意味にもなつたのである。

おほす　おひもたせる。

(一)第二十九代。

秋津島と言ふのは、神武天皇が高い丘に登つて國見をなされた時、國の形が、蜻蛉がしりをなめてゐる形に似てをるから、さう言はれたので、これも大和の一部の形勢の名であつたが、遂に全國の名となつたのである。



マルコ・ポーロ

前に言つた日本も、初めはこれを「やまと」と訓じたが、後には「ひのもと」とも訓み、また音のまゝ「につぽん」とも言つた。今の國名は日本國と言ひ、大日本帝國と言ふのである。序に言ふが、英語でジャパンと言ふのは、支那の元の頃、(一)忽必烈の朝にゐたイタリーの旅行家(二)マルコ・ポーロが、その頃の支那人が日本をジッパングーと唱へたのを、そのまに記して旅行記に書いたのが初めである。その旅行記によつ

(一)元の世祖。在位三十五年。至元三十一年（西紀一二九四年）歿。
(二)西紀一二五四年—一三二三年。

て、ヨーロッパ人は始めて我が國を知つたので、それが訛つてジャパンとなつたのである。ドイツ人はそれを自國の發音でヤパンと言ひ、フランス人はまた少し訛つてジャポンと言ふ。イタリーではジャポニイと言つてゐる。

我が日本國は實に美しい稻の豐熟する瑞穗國である。その他各種の野菜もよく成熟する。昔の語で言へば、たなつもの(田なつ物)、はたつもの(畑つ物)の豐熟する國である。氣候は溫和で、植物は繁殖する。山青く水淸く、到る所風光明媚である。浦安國、細戈千足國といふ名のあつたのも無理はない。

(一)劇作家。名は敬二。明治五年(一八七二年)東京市に生れた。

三夜叉王

(一)岡本綺堂

登場人物

面作師　夜叉王　　源左金吾頼家

夜叉王の娘　桂　　下田五郎景安

同　楓　　(一)修禪寺の僧

時　(二)元久元年七月十八日

場所　伊豆國狩野の庄修善寺村桂(三)川の畔、夜叉王の住家。

藁ぶきの古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面などを掛け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口に竹にて編みたる門外には柳の大樹その後は畑を隔てゝ、塔の峯續きの山また丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾(がますだれ)をおろせり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓門に立ちて人を見送る體。其所に修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち續いて源頼家卿(二十三歳)、後より下田五郎景安(十七八歳)頼家の太刀を捧げて出づ。

(一)靜岡縣(伊豆國)田方郡修善寺町にある曹洞宗の古刹。建仁三年(一二〇三年)頼家は此所に幽閉された。

(二)一八六四年。頼家の弑せられた日。

(三)伊豆半島の西北部なる達磨山に發し、修禪寺町の中央を西から東に貫流してゐる。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや。粗相があつてはなりませんぞ。

楓はつと平伏す。賴家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉王　思ひも寄らぬお成とて、何の設も御座りませぬが、先づあれへお通り下されませ。

賴家は緣に腰うちかく。

夜叉王　して、御用の趣は。

賴家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に殘さんと、曩にその方を召出し、賴家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣して置いたるに、日を經れども出來せず、幾度か延引を申し立てゝ今までうち過ぎしは、何たる事ぢや。

五郎　たかが面一つの細工、いかに丹精を凝すとも、百日とは費すまい。お細工仰せ附けられしは當春の初。その後既に半年をも過ぎたるに、未だ獻上致さぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、

らち（埒）

上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

賴家　余は生れついての性急ぢや。いつまで待てど暮せどうち明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣す事無用と、余が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠りをるか。子細を言へ。子細を申せ。

夜叉王　御立腹恐れ入りまして御座りまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでかなほざりに存じませうや。御用承りて既に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意にかなふ程の物一つもなく、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引

夜叉王住家（舞臺面）

のみ（鑿）
番匠

に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

賴家　えゝ、催促の都度に同じ事を……。その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　この上は唯延引とのみでは相濟むまい。いつの頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉王　その期日は申し上げられませぬ。左にのみを持ち、右につちを持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生（しゃう）なき粗木を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打ちこむ面作師。五體に漲る精力が、兩の腕におのづから集る時、我が魂魄は流るゝ如く彼に通ひて、始めて面も作れまする。但しその時が、半月の後か一月の後か、或は一年二年の後か、我ながらしかとはわかりませぬ。

僧　これ〳〵夜叉王殿、上様は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御

（一）靜岡縣（伊豆國）田方郡三島町にある。官幣大社。
うなぎ（鰻）

性急でおはしますぞ。（一）三島神社の放しうなぎを見るやうに、ぬらりくらりと取止のない事ばかり申し上げてゐたら、御癇癖が愈、募らう程に、こなたも職人冥利、いつの頃までと日を限つて、しかと御返事を申すがよからう。

夜叉王　ぢやと言うて出來ぬものはなう。

僧　何のこなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王と言へば、京、鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉王　さあ、それ故に出來ぬと言ふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と言へば、人にも少しは知られた者。たとひお咎受けうとも、己（おの）が心に染まぬ細工を世に殘すのは、いかにも無念ぢや。

賴家　なに、無念ぢやと……。さらばいかなる祟を受けうとも、早急には出來ぬと言ふか。

夜叉王　恐ながら早急には……。

賴家　むゝ、おのれ覺悟せい。

癇癖募りし賴家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出で、

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

賴家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は只今獻上致しまする。なう父様。

と顧れども、夜叉王は默して答へず。

五郎　なに、面は既に出來してをるか。

賴家　えゝ、おのれ、前後ふそろひの事を申し立てゝ、余を欺かうでな。

桂　いえ〳〵、うそいつはりでは御座りませぬ。面は確かに出來して居りまする。これ父様、もうこの上は是非が御座んすまい。

楓　ほんにさうぢやゆふべ漸く出來したといふあの面を、いつそ獻上なされては……。

こなた衆

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上様にさし上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉王　命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、その面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたがよいぞ。早う〳〵。

楓　あい〳〵。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて賴家の前に捧ぐ。賴家無言にて、少しく解けたる體なり。

桂　いつはりならぬ證據、これ御覽下さりませ。

賴家假面を取りてうち眺め、思はず感歎の聲を揚げる。

賴家　おゝ見事ぢや。よう打つたぞ。

五郎　上様おん顔に生寫ぢや。

賴家　むゝ。

と、飽かずうちまもる。僧はしたり顔に、

僧　さればこそ言はぬ事か。これ程の物が出來してゐながらとかう澁つてをられたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝ。

夜叉王容を改めて、

夜叉王　何分にも我が心にかなはぬ細工、人には見せじと存じましたが、かう相成つては致し方も御座りませぬ。方々にはその面を何と御覽なされまする。

賴家　流石は夜叉王、あつぱれのものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉王　あつぱれとの御賞美は、憚ながらおめがね違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ、面は死んで居りまする。

五郎　面が死んでをるとは……。

あやかし

夜叉王　年來數多打つたる面は、生けるが如しと人も言ひ、我も許して居りましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打直しても生きたる色なく、魂魄もなき死人の相……。それは世にある人の面では御座りませぬ、死人の面で御座りまする。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼には、やはり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉王　いや〳〵、どう見直しても、生ある人では御座りませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き怨靈あやかしなんどの類……。

僧　あゝこれ〳〵、そのやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意にかなへばそれで重疊有難く御禮を申されい。

賴家　むゝ。とにもかくにもこの面は、賴家の意にかなうた。持ちかへるぞ。

夜叉王　たつて御所望と御座りますれば……。

頼家　おゝ所望ぢや。それ。

顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ。桂箱を捧げて庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵致した。夜叉王殿、明日また逢ひませうぞ。

安堵す

頼家行きかゝりて、物につまづく

頼家　おゝ、いつの間にか暗うなつた。

僧は進み出でゝ桂に雪洞を渡す。桂假面の箱を僧に渡し、雪洞を持つて案内す。

夜叉王はじつと思案の體なり。

楓　父様、お見送を……。

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は改めてさたするぞ。

頼家等相前後して出で行く。夜叉王起ちあがつて、しばし默然として沈思しゐたりしが、やがてつか〳〵と縁に上り、細工場よりつちを持來りて、壁に掛けたる種々の假面を取りおろし、あはや打碎かんとす。

楓は驚きて取りすがりて、

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉王　せつぱ詰つて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは、悔んでも返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑をのこさば、一生の名折、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り、再びつちは持つまいぞ。

せつぱ詰る

楓　さりとは短氣で御座りませう。いかなる名人上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生のうちに一度でも、あつぱれ名作が出

來ようならば、それが卽ち名人では御座りませぬか。

夜叉王　むゝ。

楓　拙い細工を世に出したが、さ程無念と思し召さば、これから愈、精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

と、すがりて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を閉ぢたり。

日暮れて、笛の音遠く聞ゆ。

——綺堂戲曲集——

四　樹の根

和辻哲郎[1]

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へてみたことがなかつた。美しい茶褐色の幹や、わりに色の淺い淸らかな綠の葉が、永い馴染である松の

(1)哲學者、文學博士。東京帝國大學教授。明治二十年(一八八七年)兵庫縣に生れた。

樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落著いた、潤ひのある鮮かさを見せる。綠の葉は涙にぬれたやうなしをらしい色艶を增して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうなさわやかな氣分が、樹の色や光のうちに漂うて、いかにも朗かな生の喜が其所に躍つてゐるやうに感ぜられる。をりふしかはいゝ小鳥の群が活き〳〵した聲で囀り交して、綠の葉の間を樂しさうに往き來する——それが私の親しい松の樹であつた。

然るに或時、私は松の樹の生育つた小高い砂山を崩してゐる所にたゝずんで、砂の中にくひ込んだ複雜な根を見る事が出來た。地上と地下との姿が何とひどく相違してゐる事だらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先をそろへた針葉と、——それに比べて地下の根は、戰ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力を盡したやう

に、枝から枝と分れて、亂れた女の髪の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱き附いてゐる。私はこのやうな根が地下にある事を知つてはゐた。しかし、それを目の前にまざ〳〵と見た時には、思はず驚異の情に打たれぬ譯には行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下の苦しみが不斷に彼等にある事を、一度も自分の心臟で感じた事がなかつたのである。彼の苦しみの聲を聞いたのは、時をりに吹く烈風の際であつた。彼の苦しさうな顏を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。しかし、その叫聲や萎れた顏も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活に復つて、苦しみの痕をめつたに後へ殘さない。しかも彼等は、我々の眼に祕められた地下の營を、一日も怠つた事がないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ綠の花粉も、實にこのやうな苦勞の上にのみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感ずるやうになつた。彼等は我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜の木から、何とも言へぬ莊嚴な心持を押附けられた。なる程これは靈山だと思はずにはゐられなかつた。この地を選んだ弘法大師の見識にも、つく〳〵敬服するやうな氣持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて平野から切離された、急峻な山の斜面である。幾世紀を經て來たかわからない老樹たちは、金剛

金剛不壞

不壞（ふゑ）といふ言葉に似つかはしい程な、どつしりとした、迷のない、壯大な力强さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた〳〵と人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地中の烈しい營は、既に地上一尺の所に明らかに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へる爲に、太い强靭な根は力限り四方へ擴がつて、地下の岩にしつかりと抱附いてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入混つて、薄い地の層の間に複雜にからみ合つてゐる有樣は、想像するだけで我々に驚異の情を起させる。

確かに山は烈しい生の力の營によつて、殘る所なく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見る事は出來なかつたが、

しかし、一種の靈氣として感ずる事は出來た。隱れた努力の威壓が神祕の影をさへ帶びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の淺い自分を恥ぢた。さうして地下の營に沒頭する事を自分に誓つた。今氣附いてもまだ遲くない。

成長を欲する者は、先づ根を確かにおろさなくてはならぬ。
上に伸びる事をのみ欲するな。先づ下にくひ入る事に努めよ。

壯年にして成長の止る人がある。根を疎かにしたからである。
四十に近づいて急に美しい花を開き、豐かな果實を結ぶ人がある。下にくひ入る事に沒頭してゐたからである。

私の知人にも、理解の良い頭と、感激の强い心臟と、よく立つ筆と

勞作

を持ちながら、まるで勞作を發表しようとしない人がある。彼は今生きる事の苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる値打もないとさへ思つてゐる。しかし、それは彼の根が一つの地殼に突當つて、それを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか――。私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生れるはずはない。

古來の偉人には雄大な根の營があつた。それ故に、彼等の仕事は味はへば味はふ程深い味はひを示して來る。

現代には、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすれば、それが小さい植木鉢の中の仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種が出來るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてが餘りに人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸す事が出來ない。

天を突かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生れるはずがない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬である事を考へてみなければならぬ。

根の爲には、出來るならば地の質を選ばなくてはならぬ。

果實の爲には、出來るならば根を培ふ肥料を選ばなくてはならぬ。

根に對する情熱を鼓吹し、その根の本能的に好むところの土壤のありかを教へ、さうして幾千年來堆積してゐる滋養分をその根

に供給してやるのが、教養の任務である。それが植木鉢に墮するか否かは、人の問題であつて、制度の問題ではない。

教養は培養である。それが有效である爲には、先づ生活の大地にくひ入らうとする根がなくてはならぬ。

人々は餘りに根の本能を忘れてゐはしないか。いかに貴い肥料が加へられても、それを吸收する力のない所では何の役にも立たない。私は教養の機會と材料とが、我々の前に乏しいとは思はない。唯それに相當する根が小さいのを恐れる。

汝の根に注意を集めよ。

—偶像再興—

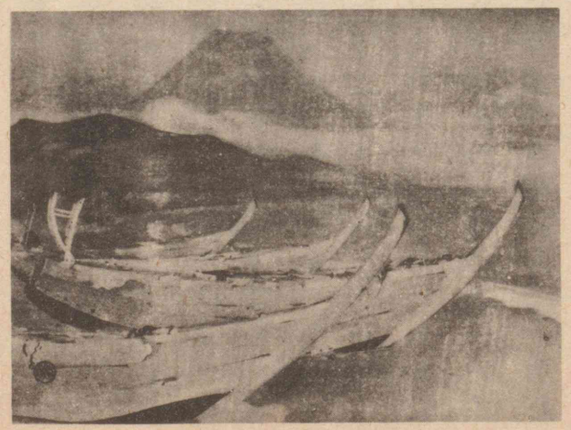
五　潮待つ間

幸田露伴[1]

[1] 文學者、文學博士。名は成行。慶應三年（一八六七年）江戸に生れた。

風に逆らひて舟を行るには、間切るといふ工夫もあり、流に逆らひて舟を進むるには、押切るといふ意地もあれど、唯春の日の潮の底（くた）りて、遠淺の海の盡く干潟となりたる時のみは、意地にも工夫にも舟を操らん途なく、あだに心の焦らるゝものなり。

嘗てこの事を言出でゝ、「さるをりにも何とかなすべき手段はなきにや」と年老いて物事にいと巧者なる舟人に問ひけるに、舟人はうち笑ひ、「いつにても纜を解かんとならば、いつにても水ある所に船を繫ぐべし。我等は繫ぐ時には解く事を思ひて繫ぎ、解く時には繫ぐ事を



干潟の舟（川端龍子筆）

思ひて解く。これに反して、素人は繫ぐ時には解く事を思はず、解く時には繫ぐ事を思はず。是を以て、歸らんとして歸る能はず、進まんとして進む能はず、徒に心を干潟に焦るやうの事もあるに至るなり。若し干潟にゐすわりたる舟となりたらんには、我等なりとてその場に臨みて何の手段かあるべき。唯少し早くとも心長閑に食事など濟ませて、やがて立働かんをりに足もつれのせぬやうに舟の中を取片づけ、なほそれにても時餘らば、舟道具を丁寧に檢め繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚かしけれども、潮を待たぬよりは賢きわざなり。いつか一たびはなさでかなはぬ事をなしつゝ待たば、必ず來るべき潮は大抵その事をなし終へぬ程に早く來るものなり。いつか一度なさでかなはぬ事は、小さき舟の中にてもいと多きものなれば、潮待つ間になすべき事のなしと言ふはなし。潮待つ間になすべき事のあるを見出してこれをなさば、唯時の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心の焦らるゝ事などあるべくもなし」と言ひけり。面白き言葉なりと思ひしかば、今に忘れず。

——潮待ち草——

六　鈍と根

永井潛[一]

時利[二]あらず雖逝かず、乾坤一擲の關ヶ原[三]の戰に敗れて、草深い近江の山中に疫を病んで捕へられた石田三成が、京都へ護送される時の事であつた。途中で咽喉の渴を覺えた三成は、湯を所望した。ところがその邊に湯がなかつたので、警固の者が

「生憎この邊には湯がありませぬ。幸ひ此所に柿がありますから、これを召上つては如何で御座いますか」

と尋ねると、三成は

「いや〳〵、志は有難いが、それは胃腸の病には毒だと言ふから食

(一)生理學者、醫學博士。東京帝國大學名譽教授、臺北帝國大學醫學部長。明治九年(一八七六)廣島縣に生れた。

(二)楚の項羽が垓下に敗れた時歌つた詩の一句。全詩は「力山を拔き氣は世を蓋ふ。時利あらず騅逝かず。騅逝かず奈何すべき。虞や虞や若を奈何せん。」

(三)岐阜縣(美濃國)不破郡。

毒忌

面目躍如

べまい。」

と斷つた。間もなく首を刎ねられる身で毒忌もをかしいと、傍の者が嘲つたのを聞いて、三成は微笑しながら、

「お前たちがさう思ふのも無理ではないが、大義を志す者にあつては、たとひ間もなく首を落されるにしても、いよ〳〵の時までは命を大切にし、どうかして本意を達しようと思ふのが道である。」

石田三成

と言つたが、家康がこれを聞いて憐んで、緞子の夜著を贈つて來た時、三成は決然としてこれを斥けて言つた。「敵人の恩惠に浴してまでも我が生を貪る心はもたぬ」と。三成の三成たる面目が躍如としてゐるではないか。誠に爲すある人間の心掛は、常人と異なるもののある事を深く感ぜしめる。

昔から、立身出世になくてはならない條件として、運、鈍、根の三つを數へて來たが、生活が行詰り、餘裕が少くなつた近頃では、それに金を加へんとする者もあるやうである。

運とは人力で如何ともし難い、少くとも如何ともし難く見える自然の命數を引きくるめたもので、神ならぬ人間では、出世の準備にしたくも、どうにもならないものかも知れぬ。さりながら、「物情の向背を洞してその機を握り、陰陽の消長を察してその運に乘ず」と昔の人も教へてゐるやうに、周到であり機敏である事によつてこの大切な運をつかむ事は、或程度まで不可能の事ではなからう。

次には、何事も營利主義の現代の社會生活では、金が非常な威力をもつて、立身出世の助になる事は言ふまでもないが、しかし、多くの場合にあつては、金を儲ける事それ自身が、立身出世の重要な一

兒孫の爲に美田を買はぬ

得意恬然
失意泰然

方面をなしてゐるのであるから、初から金力をもつて競爭場裡に臨んだのでは、たとひその優者となつたところで、金の上に金の鍍金をするやうなもので、それでは一向に精華なく、光彩なく、痛快味がない。しかも金を持つてゐるが爲に、或は金の奴隷となり、或は金の爲に軟化して、却つて立身出世を妨げる場合も少くはないのである。この事は、古往今來、偉人傑士が多く貧賤な階級から崛起してゐるのを見てもわかるし、また心ある人士が、兒孫の爲に美田を買はなかつた理由も首肯されるのである。して見ると、立身出世の大切な準備は、所詮は鈍と根との二つに歸著すると言ふべきである。

そして、鈍の根とは、畢竟するに體力の問題に外ならぬ。體力旺盛で心身が常に健かであれば、心廣く體ゆたかであつて、物事に動ずる事がない。いはゆる得意恬然、失意泰然で、得る事があつても調子に乘らず、失ふ事があつても敢へていぢけず、自若として終始正しきに居り、正しきに處する事が出來る。これ卽ち鈍の成功に大切な所以である。

節度を失ふ
世と相容れず

明々白々

裨益する

これに反して、體力は萎靡し身體が虛弱であると、精神もおのづから萎靡し、心身が鬱屈すると必ず神經過敏となり、事毎に焦躁憂苦して進退常に節度を失ひ、或はひたすら感情に馳せて輕擧妄動し、或は猜疑嫉妬して世と相容れず、必然失敗の谷底に陷るのである。殊にこの關係は、劇甚な生存競爭の渦中に喘ぎつゝある近代人に取つて、最も大切な意義をもつてゐる。更にまた、根が完全な健康によつて始めて保持される事は明々白々であつて、改めて言ふまでもないのである。

人が世に立ち志を遂げる上に、かくばかり大切な關係をもつところの體力は、その人が既に或程度の成功を收め、活動の地位を得て、その材に應じその分に隨つて、世道の進運に寄與し、人生に裨益

(一)アメリカの文學者、哲學者。(西紀一八〇三年—一八八二年)

(二)著述家、廣告及び印刷術研究家。明治十八年(一八八五年)鹿兒島縣に生れた。

(三)キリスト教の信者がキリストの誕生を祝ふ。毎年十二月二十五日に行ふ。

(四)費府。アメリカのペンシルバニヤ州の首都。

するところあらんとする場合、一層大切になつて來る。(一)エマスンが言つたやうに「人間第一の財產」は何と言つても健康である。若し健康でなかつたならば、人世は唯暗黑あるのみである。一切の名譽も、財寶も、權力も、何等の光彩、何等の幸福をもかち得ないのである。

——人及び人の力——

七　ジョン・ワナメーカー

郡山幸男

(三)クリスマスが近附いた或日のこと、(四)フィラデルフィヤ市のとある街の貴金屬店に、見すぼらしい身なりをした、虛弱さうな一人の少年が入つて、頻りに飾棚をのぞいてゐたが、やがて一つの襟飾を選んで買つた。店員がそれを包む間に、尙あちこちと見廻してゐた少年は、更に好ましい品を見附けたので、前のとの取替を賴んでみた。ところが「もう取引は濟んだのだから」とて、素氣なく斷られた。少年は

週給

(一)リンカーン大統領の執政中黑人奴隸存廢を問題として、南北の內亂。(西紀一八六一年—一八六五年)休戰。

(二)西紀一八三八年—一九二二年。

寂しい心持を抱いて、店を立去つた。

これは後年、小賣組織の革新者となつて、信念の巨商と萬人に憧憬されたジョン・ワナメーカー(一)が十四歳の時の姿である。始めて週給一ドル二十五セントにありついた年の暮、慈愛深い母親への心からなる買物をした時の姿である。

ジョン・ワナメーカー

いつしか十年を經過して、(二)南北戰爭の火蓋が將に切られんとして、人心は不安に戰き、財界は一大パニックに襲はれ、街には今に草が生えるぞとうはさされてゐた時に、フィラデルフィヤの目拔の場所に、せつせと開店の準備を急いでゐる者があつた。その板圍をはじめ、附近の空地の板壁といふ板壁には、墨痕鮮かに W&B の三字が、途方もなく大きく書かれたので、行交ふ人々は、何れも奇異の目をそばだてた。

奇智が閃く

さて、愈、蓋が明けられたのを見ると、それは「ワナメーカー及びブラウン商店」で、青春二十三歳のワナメーカーが、義兄ブラウンと共同で、始めて旗揚をした紳士服店であつた。W & Bの三文字は、彼等が姓の頭文字を列ねただけに過ぎなかつたのだが、殊更にこれを大きく書いて人目を惹いたところに、廣告の天才と稱せられた我がワナメーカーの奇智が先づ閃いたのである。

この紳士服店の第一日の總收入は、二十四ドル六十七セントであつたが、後年、一日に百萬ドルの賣上記錄を作つたワナメーカーは、流石に大膽であつた。彼は端錢六十七セントを翌日の釣錢にと取除け、殘りの二十四ドルを持つて急いで新聞社へ行つて、廣告を依頼した。

「紳士服一著そろつて三ドル」といふ大廣告が、翌日の新聞に出て人目を惹いた。いかに物價の安いその頃でも、一著そろつて三ドル

破天荒

商策

とは破天荒の安値であつて、殆ど利益はなかつたのだが、一には新店の廣告、二にはたとひ薄口錢でも、品がさばければ資金の回轉率が高まるので、結局は高利率になると見込んでの新商策であつた。

次の廣告には、「値段に二つなし、たつた一つ」「返品御自由、返金も致します」と書いた。十年前、貧しい少年が、クリスマスの買物で嘗めた苦い經驗と寂しい心持とが、茲に大きな教訓となつて反映して來たのであつて、やがてまた、これが全米國の小賣組織に革新をもたらす一大動機ともなつたのである。

「お客は常に正しい」といふ廣告句は、ワナメーカーが特に著作權を請求した程に愛したもので、屢、繰返して廣告中に挿入すると共に、店員訓育の資料ともした。「お客は目が高い。何事にまれ、少々無理を言はれても、それには何か教訓があるはずだ。お客は常に正しい」と言つて、彼は店員たちを戒めたが、これもまた、例のクリスマスの

買物が與へた尊い教訓であつた事は、言ふまでもない。

彼が決して經驗をむだにしない人であつた事は、少年時代の一つの經驗に懲りて、「借金せぬ主義」を生涯立通した事實によつても證明される。

皆濟する
骨身にこたへる

彼は僅かに十歳で既に父の煉瓦燒の手傳をしなければならなかつた程に貧しい家に生れたのだから、始めて幾らかの給料を得るやうになつた時にも、その大部分はこれを一家糊口の資に供して、餘裕と言つては殆どなかつた。にも拘らず、赤革表紙の立派な聖書一卷を月賦拂で買入れた。その代金は二ドル七十五セントで、後年自ら「最初の最大なる買物にして最大なる負債」と語つた程に、當時の彼には大きな事件であつた。彼はこれを皆濟するのに實に一年半を要したが、その間の苦しみは非常なもので、眞に骨身にこたへたので、その後は、いかなる場合にも決して借金しないといふ主義を通した。

壓するの概があつた

さて彼の事業は、誠實と、奉仕と、これを有力に表現する奇策とで、爾來急速に、しかも確實に發展して、彼が齡七十に垂んとする千九百七年の頃には、フィラデルフィヤ及びニューヨークの二大都に大店鋪を有し、從業員實に一萬三千餘人、ワナメーカー商店の名は、獨り米國のみならず、世界の商界を壓するの概があつた。その時フィラデルフィヤ本店は、總面積二百萬平方フィートの新建築にかゝつて、その完成に近附きつゝあつたが、ニューヨークの支店もまた、これに劣らない程の新館の建築を進めてゐた。

ワナメーカー百貨店

(一)スペイン領キューバ島の叛亂に際し、その鎮壓を理由としてアメリカ合衆國とスペインとの間に行はれた戰爭。西紀一八九八年。

喧傳する

豪語する

決濟する

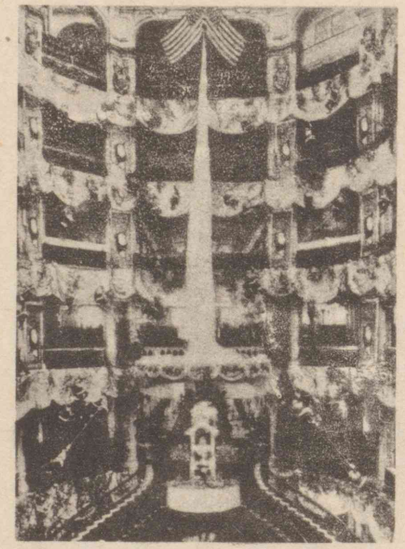
證左

をりしも襲つて來たのが米西戰爭(一)の恐しいパニックである。さらでだに同業者が嫉視の的となり、惡宣傳の行はれてゐた時に、少からぬ資金を固定せしめたのであるから、ワナメーカー破產のうはさは一時に喧傳された。流石に精悍な老ワナメーカーも、この時ばかりはその打擊のひどさに內心大いに驚いたらしかつたが、でも尙、有利な買收の申出には耳を藉さずに、「ワナメーカーの名は賣る爲の名ではない」と豪語して、孤軍奮鬪、縱橫の奇策を運らし、遂に二千萬ドルに近い手形を決濟した。しかもこの時ですら、彼は保險會社が金融機關である事を知らなかつたと告白して、世間を驚かした。「借金せぬ主義」を立通した一證左である。

既に一貧窮兒にして、尙聖書を最初の最大な買物とした程の彼である。その生涯は全く信仰に終始した。「考へて、試みて、努めて、後は神樣にお委せする。これが私の生涯だ」と彼は言つたが、事實、これが

(一)第二十三期の大統領。(西紀一八三三年—一九〇一年)

彼の事業遂行と處世との原則であつた。二十歲の時に、フィラデルフィヤの貧民窟にベタニヤ日曜學校を開いて以來、常に神への奉仕を怠らず、世界日曜學校協會長、フィラデルフィヤ青年會長をはじめ、敎界に貢獻したところもまた多大であつた。遂にその手は廣く諸外國にまで延び、我が京都青年會館は千九百九年に、京城青年會館は千九百十三年に、何れも彼の寄附によつて成つた。これより先、千八百八十九年、大統領ハリソンの下に遞信大臣となつた時にも、彼はベタニヤ日曜學校への出席をば第一條件としたが、自己の店務は、在任四年間は全く見なかつた程である。



ワナメーカー百貨店の內部

されば常に同業者をして、その奇策端倪すべからずと歎ぜしめた彼の販賣策や、これを擴充する廣告もまた、悉く信念の告白に外ならなかつた。彼はその廣告の中に屢論說を掲げて輿論の指導に力め、また常に廣告文の終に自署して、責任を明らかにした。廣告文に著作權を附する事も彼の發意である。今日、米國の多くの信用すべき新聞雜誌に掲載される廣告が、悉く嚴格な審査を經て、信ずべからざる物、社會の安寧に害ある物が全く跡を絕つに至つたのは、主として婦人雜誌「レディーズ・ホーム・ジャーナル」の主筆であつた故エドワード・ボックの努力によるのであるが、また我がワナメーカーと、彼の爲に廣告立案の任に當つたパワーズとに負ふところが大であつた事は、米國廣告界の一般に承認するところである。

奉公の念に厚かつた事もワナメーカーの一大特色である。米國が歐洲大戰に參加して以來、五回に亙つて募集した自由公債に、彼

(一)カーチス出版會社の副社長兼編輯長であつた。

警句

(一)ジョン・ワナメーカーの次男。現店主。

自ら應募したもの二千萬ドル、別に店員の應募したものを加へて、實に六千萬ドルに達した。後、店員にしてこれを現金に替へん事を乞ふ者があると、いかに時價の暴落した時でも、彼は額面通りに買つて、店員に應募を勸めた責任を明らかにした。

また大戰が止んでも尙異常な物價騰貴の續いてゐるのを見ると、彼は後繼者ロドマン・ワナメーカー(一)をして、物價引下の急先鋒たらしめた。即ち先づ二千萬ドルに値する在庫品の正價二割引の販賣を宣言せしめ、尙足らずして、新たに一千三百萬ドルの商品を仕入れて、一箇月に亙つてこれを續行させた。これによつてワナメーカー商店の失つたところは、實に一百萬ドルを遙かに超えたと言はれる。

創業六十周年、頽齡八十三歲の時に、人の彼に向つて健康を祝する者があると、「幸福にも忙しい」と警句を以て答へて、彼は尙社會奉

仕の可能な意氣を示した。

今日我々外國人が米國に遊んで、千七百七十六年かの十三州の名士たちが獨立を宣言した地であるフィラデルフィヤに入り、先づ獨立閣その他二三の名所舊蹟の見物が終れば、人は必ずワナメーカー商店の觀覽を勸める。市廳の高塔の上に、開拓者ウィリアム・ペンが像を仰ぎ見つゝ宏壯な店鋪に入ると、忽ち我等の耳目を奪ふ物は、同店が自らグランド・コートと命名した大廣間の壯觀と殷賑とである。其所にはその重量三十七萬五千ポンドといふ世界最大のパイプオルガンをはじめ、珍奇な物の數々あるが中に、一つの大理石柱に、左の如く譯せらるべき章句が、金文字で鮮かに刻まれてあるのを見る。

我に從ふ者をして、名譽たる鉛垂と、眞理たる平準器と、誠實たる規矩とを以て、教養、慇懃、互助を不斷に築かしめよ。

(一)フィラデルフィヤ市廳に隣接してゐる。
(二)イギリスの宗教家。ペンシルバニヤ州の開拓者。(西紀一六四四年—一七一八年)

ポンド(封度)

これぞ彼が、その後繼者及び從業員に對する永遠の戒告であり、希望であるばかりでなく、また實に、彼自らの覺悟を示し、その全生涯を語るものなのである。

ジョン・ワナメーカー

自修文　白銅の光

岡本綺堂

何事につけても世界第一を誇らうとするニューヨーク人は、更に誇つてよい物を近年二つまで見出した。その一つは、新しく出來たホテル・ペンシルバニヤで、部屋が二千二百、浴室が同じく二千二百。成程、これは世界第一と誇るに足る値があらう。もう一つは、少し以前に出來上つたウールウォース・ビルディングで、雲を凌ぐ五十八階の高塔。これにも世界第一の賞牌を與へてよからう。その高い塔の持主のフランク・ウールウォースは、千九百十九年四月三日に六十八回の誕辰を迎へて、その七日の午前一時には、ロン

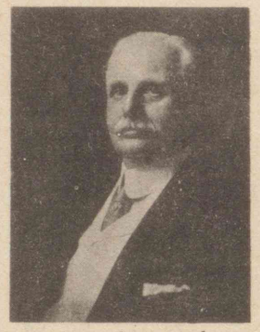
(一)ニューヨーク市に聳える著名な摩天樓。高さ二四一メートル餘。二十數年前までは世界最高の建物であつた。現在ではエンパイヤ・ビルディングが第一の高層建築である。
(二)アメリカの實業家。(西紀一八五二年—一九一九年)

誕辰　たんじやうび。
(三)ニューヨーク州の島。

グ・アイランドの自邸でこの世界に永久の別れを告げた。

彼の名の高いのは、ビルディングの塔の高い爲ばかりではない。それだけならば、金持なら誰にでも出來る事かも知れない。ウールウォースの名が小兒にまでも知られてゐるのは、白銅の光の爲である。五セントの白銅一箇で殆ど何でも買へるといふデパートメント・ストーアを經營してゐる爲である。今日では、物價騰貴の爲に、商品は五セントと十セントとの二種に分れてゐるが、決してそれ以上に越えない。その上その特色は、決して「廉からう、惡からう」の粗製品を賣らないといふ點にある。物價の高い米國で、五セント、十セントの商品だけを賣つて利益を得ようといふのは、隨分困難な仕事に相違ない。果して彼は幾度か失敗した。それでも根强く押通して、今日の彼は英米に跨がつて千五百有餘の支店を有し、一年の總賣上高は約七億ドルと傳へられてゐる。ウールウォースの名が到る所に喧傳されるのも無理はない。

千八百五十二年四月三日に、ニューヨーク州のロッドマンに生れた彼は、貧乏な一農夫の子であつた。かういふ人物の青年時代が貧苦と奮鬪との歷史に滿ちてゐる事は、昔からその例に乏しくない。彼もやはりその一人で、彼自身の話によると、「私の家の貧乏はお話にならないくらゐで、どんなに寒い冬でも、オーバーコートを買ふ事も出來ない時があつた」さうである。それでも彼は小學校を卒業して、商業學校に二年程通ふ事が出來た。彼は農家の育ちながら、自分は商人になるか機關士になるか、それより外に歩むべき道はないと考へたので、十八歳の時に、自分の村から七マイル程離れたカーセージ(一)へ奉公口を探しに出たが、どの店でも、この貧乏な青年を相手にしてくれる者はなかつた。彼は粗末な農夫の衣服を著て、カラーさへも著けてゐなかつたのであつた。


スーォウルーウ

(一)ニューヨーク州の都邑。

しかし、彼は根氣よくそれからそれへと搜し歩いて、やう〳〵の事で、(一)グレート・ベンドといふ小さい村の雜貨店に雇はれる事になつた。其所の主人は村の停車場の驛長を勤める傍、商店を開いてゐたので、彼は店の商品の外に、汽車の切符をも賣らせられた。但し、其所では唯食はしてもらふだけで、給料は一文ももらへなかつた。ウールウォースが始めて一週間に三ドル五十セントの給料をもらふやうになつたのは、二十一歳の年に、グレート・ベンドを立退いて、(二)ウォータータウンのオーグズベリー・ムーア商會に雇はれた時であつた。此所では主人の命令で、流石の彼もカラーを買はなければならない事になつた。

ウールウォースは二十五歳の六月に、同じ町のジェニー・クレートンといふ婦人と結婚した。その時には、給料も毎週十ドルに昇つてゐたが、夫婦暮しで一箇月四十ドルの收入では、その時代でも決して安樂ではなかつた。彼は苦しい中から多少の貯金を作ら

(一)ニューヨーク州。

(二)ニューヨーク州の市。

うとあせつてゐるうちに、過度の勤勞の爲にひどく健康を傷めたので、據なく自分の職業を抛つて、ひと先づ故郷のロッドマンに歸つた。しかも彼は病軀を抱へて、何かの機會を狙つてゐた。その間にふと眼を著けたのが、かの「五セント商店」であつた。

勿論これはウールウォース一人が特に思ひ附いた事ではなかつた。その當時、この「五セント商店」をもくろんだ者は他にも大勢あつた。彼等は皆相當の資本をもつてゐたが、ウールウォースは身代を振つて、たつた五十ドルの資本を作る事が出來ただけであつた。五十ドルでは、到底大勢の競爭者と鬪ふ事は出來ない。第一、店を開く事すら困難なのである。彼は無理工面をして、やう〳〵三百ドルの金を借出して、自分の有金五十ドルと併せて、三百五十ドルの資本を作つた。かうして始めて(一)ユーチカの町に「五セント商店」を開業したのは、彼が二十六歳の春で、商品の仕入と開業費とに三百四十五ドルを費してしまつて、開店の朝、彼のポケット

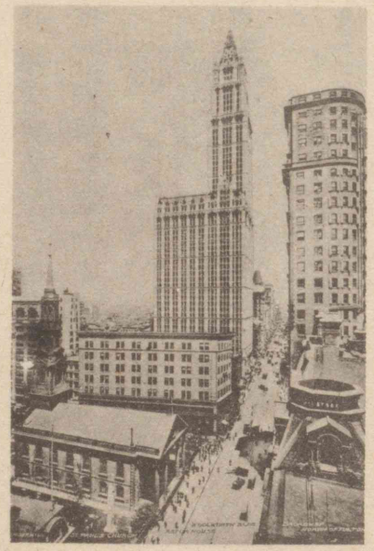
(一)ニューヨーク州の市。

に殘つてゐたのは、たつた五ドルであつた。かういふ大膽な事業にも幸に彼は成功した。他の競爭者が續々倒れる間に、ウールウォースの店だけは益々繁昌して、更にペンシルバニヤのランカスターに移轉した所、成績が良かつたので、更にハリスバーグに支店を開いた。しかし、これは思はしくなかつたので、間もなく閉店して、今度はやはりペンシルバニヤのヨークに新しく開業したが、これも失敗して、三箇月後には閉店の憂目を見るやうになつた。

かうして色々の損失が續いたが、ランカスターと、もう一つスクラントン(一)にある店だけは辛くも持ちこたへて、奮闘してゐた。「何でも構はずに進まなければいけない。倒れたらまた起きて進むのだ」これがウールウォースの主義であつた。彼は幾分かの融通が出來ると、更にまたペンシルバニヤのリーディングに支店を開いた。これは幸に好成績を擧げた。かうして約十年を送る間に、「五セント商店」の信用は段々に高まつて來た。五セントでは到底ろ

(一)ペンシルバニヤ州の市。

くな品物を賣るはずがないと侮つてゐた人たちも、いつの間にかその店の窓をのぞくやうになつた。かうして店は日ましに繁昌して來たが、彼は少しでも餘裕が出來ると、到る所に支店を開く事を忘れなかつた。それと同時に、成るべく商品の種類を殖す事も怠らなかつた。どうにかかうにか五セントでも我慢して賣られる程度の品物は、何でも構はず仕入れて、店に列べた。



ウールウォース・ビルディング（中央）

その後の事は一々書くまでもない。彼が二十六歳で始めて「五セント商店」を開いてから、丁度四十年目の今日では、前にも言つたやうに、千五百有餘の支店を有するやうになつたのを見ても、その成功の跡は歴々と認められるであらう。彼が現在の資産は

歴々　明らかなさま。

六千五百萬ドルに上ると傳へられてゐる。彼はその成功の記念として、ニューヨーク市を飾る爲に、いはゆる世界第一のウールウォース・ビルディングを(一)ブロードウェーの繁華な巷に建てた。

建物は地上から塔の頂上まで七百九十二フィート。その構造の詳細は、載せて一卷の書物になつてゐるくらゐであるから、今此所で簡單に紹介する譯にはいかないが、ともかくも大通の眞中に突つ立つて、ニューヨーク全市を眼下に見おろしてゐるこの巨大な建物が、根氣よく白銅一箇づつを積立てゝ出來上つたものである事を忘れてはならない。

ウールウォースの「五セント商店」が、今日までに幾千億人に便利を與へたか、それはそれとして、この巨大なビルディングは、白銅一箇が等閑に出來ないといふ教訓を、永く米人に垂れるであらう。

(一)ニューヨーク市マンハッタン區の中央部約八キロメートルを南北に貫通する大通。同市の最中心をなす。

八菊

中西悟堂(二)

(二)詩人。明治二十八年(一八九五年)金澤市に生れた。

麗かな菊の園を私は歩きまはる。
高貴な花の間を、
優雅な香の中を、
王子のやうに爽かに歩きながら、
私は日本の花の王を讃へる。
何といふ清淨な誇らかさ、
何といふ美しいしとやかさであらう、
純白な花、黄いろい花、
伸びた花びら、卷かれた花びら、
花は花に隱れ、花は花から秀でて、
鮮かに優しく、
寶石のやうに日の光に浮ぶ。

清潔な祭のやうな、神聖な彫刻のやうな、
尊い、畏い日本の花よ。
あゝ、鶴のやうな心になつて、
この日本の花の王のうたげの中を、
秋の日のうたげの中を、
爽かに私は歩きまはる。

九　空行く雁

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、あらたまの年立返りて一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。誠やらん、父の御事は佛になつてましますとや。その佛はいづくにましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前いざさせ給へ」と言ひけれ

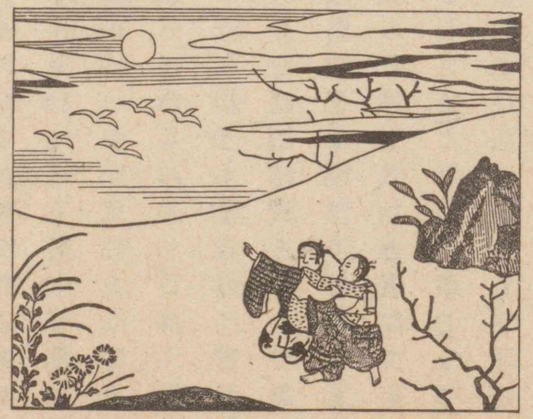
(一)一八四一年。
(二)兄曾我十郎祐成の幼名。
(三)弟曾我五郎時致の幼名。

うたげ

いざさせ給へ

ば、遙かに忘れたる來し方も、今更思ひ出されて、消入るばかりなり。母泣く〳〵宣ひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ」と心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、「父御前は、誠やらん狩場より歸り給ふ途にて工藤一萬とやらんに射られて死に給ひぬと、兄御前は語らせ給ふぞや。當時、鎌倉殿の切者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこの里にあるを知らでや過ぐらん」など大人しく語りければ、母より始めて



曾我兄弟（古版本挿繪）

(一)夫祐泰の死後曾我祐信に再嫁した。
(二)祐信。
(三)祐經。
(四)源頼朝。
(五)相模國（神奈川縣）足柄下郡下曾我村。

かりがね

人倫

(一)三郎祐泰。

小賢しく

女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたるかりがねの、南をさして飛行くを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ箱王殿、空を飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。五つ連れたるは、一つは父、一つは母、三つは子供にてぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、わ殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿(一)と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬、鞍をも賜はり、弓、矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我等より幼き者にても、馬、鞍、弓、矢をもて物を射ありく事の羨ましさよ。これ等の事ども思ひ續くれば、いつもよりも今宵は父御前のこひしくおはしますぞや」とて、袖に顔を差入れてさめ〴〵と泣きければ、弟も小賢しく顔を合せて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし。人もこそ聞け。いかにわ上萬たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。疾く〳〵入らせ給へ」と恐しげに言ひければ、二人の者は門外へ逃出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにけり。

年ばへ

その後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世に亡き父を慕ひつゝ、語り合するまではなけれども、唯目ばかりを見合せて、互に袖をぞぬらしける。ある時兄弟は、竹の小弓に薄はぎの小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬、箱王に申しけるは、「我等もいつか成長して、わ殿は十三、我は十五にだにもならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く差合ひ射取りて後には、ともかくもなりなん。わ殿も弓をよく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ」と言ひければ、弟もうちうなづきけり。年ば

へには恐しき事かなと人々思ひけり。

—異本曾我物語—

一〇　武藏野

國木田獨歩

昔の武藏野は、萱原のはてもない光景で、絶類の美を鳴してゐたやうに言傳へられてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色と言つてもよい。その木は主にならの類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新綠が萌出る。その變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に雨に、月に風に、霧に時雨に雪に、綠蔭に紅葉に、樣々の光景を呈する。その妙は、ちよつと西國や東北地方の者にはわかりかねる。元來日本人は、これまでならの類の落葉林の美を餘り知らなかつた。林と言へば、主に松林のみが日本の文學、美術の上に認められてゐて、歌

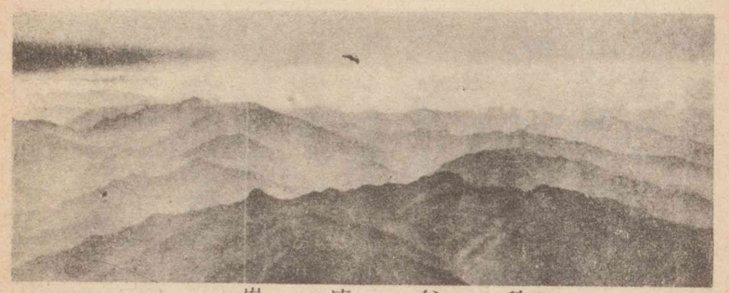
國木田獨歩

(一)小說家。名は哲夫。千葉縣の人。明治四十一年(一九〇八年)歿、年三十八。

(二)埼玉縣秩父郡。

にも、なら林の奥で時雨を聞くといふやうな事は頗る稀である。自分は(一)ツルゲーネフの書いた物で、(二)二葉亭が譯したある短篇の冒頭にある左の一節を愛讀する。

秋九月中旬といふ頃、一日(あるひ)自分がさる樺の林の中に坐してゐた事があつた。朝から小雨が降注ぎ、その晴間にはをり〳〵なま暖かい日影も射して、誠に氣まぐれな空合。あはあはしい白雲が空一面にたなびくかと思ふと、ふとまた、あちこち瞬く間雲切がして、無理に押分けたやうな雲間から、澄んで賢しげに見える人の眼の如く、朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧し



秩父連峯

(一)ロシヤの小說家。(西紀一八一八年—一八八三年)

(二)二葉亭四迷。小說家。本名は長谷川辰之助。愛知縣の人。明治四十二年(一九〇九年)歿、年四十六。

氣まぐれな空合

て、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽に戰いだが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは、春先する面白さうな笑ふやうなさゞめきでもなく、夏の緩やかな戰ぎでもなく、長たらしい話聲でもなく、また秋の末のおど〳〵した薄寒さうなお饒舌でもなかつたが、唯漸く聽取れるか聽取れぬ程のしめやかな私語の聲であつた。そよ吹く風は忍ぶやうに梢を傳はつた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中の樣子が、間斷なく移り變つた。或は其所にありとある物すべてが一時に微笑したやうに、隈なく赤み渡つて、さのみ繁くもない樺の細々とした幹は、思ひがけずも白絹めく優しい光澤を帶び、地上に散布いた細かな落葉は俄に目に映じて、眩きまでに金色を放ち、頭を搔きむしつたやうなバアボロトニクの見事な莖、しかも熟れ過ぎた葡萄めく色を帶びたのが、際限もなくもつれつからみつして、目前に透か

(一)わらびの類。
もつれ(纏)

して見られた。

物のあいろ

或はまた、四邊一面俄に薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立も、降積つたまゝでまだ日の目に逢はぬ雪のやうに、白く朧に霞む。　と、小雨が忍びやかに怪しげに私語するやうに、ばら〳〵と降つて通つた。樺の木の葉は著しく光澤がさめても、流石になほ青かつたが、唯そちこちに立つ稚木のみは、今はすべて赤くも黃色くも色づいて、をり〳〵日の光が、今雨にぬれたばかりの細枝の繁みを漏れて、滑りながらに脫けて來るのを浴びては、きら〳〵と煌いた。

自分が落葉林の趣を解するに至つたのには、この微妙な敍景の筆の力が多い。これはロシヤの景で、しかも林は樺の木で、武藏野の林はならの木だから、植物帶から言ふと甚だ異なつてゐるが、落葉林の野である事は同じである。自分は屢、思つた、若し武藏野の林が

ならの類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な、變化に乏しい色彩の一樣なものとなつて、さまで珍重するに足らぬだらうと。

ならの類だから黃葉する。黃葉するから落葉する。時雨がさゝやく。木枯が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉高く大空に舞つて、小鳥の群のやうに遠く飛去る。木の葉が落盡せば、數十里の方域に亙る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高くその上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段と澄渡る。遠い物音が鮮かに聞、える。自分は日記に「林の奧に坐して四顧し、傾聽し、諦視し、默想す」と書いた。ツルゲーネフも「坐して、四顧して、そして耳を傾けた」と書いてゐるが、この耳を傾けて聽くといふ事が、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心にかなつてゐるだらう。秋ならば林の中から起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風の戰ぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奧にす

諦視する

だく蟲の音。空車、荷車の林をめぐり、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散す音。これは騎兵演習の斥候か、さもなくば夫婦連で遠乘に出掛けた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それもいつしか遠ざかつて行く。獨り寂しさうに路を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃音。

だみ聲

時雨の音に至つては、これ程幽寂なものはない。昔から和歌の題にまでなつてゐる。廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、また林を越えて、忍びやかに通り過ぎる時雨の音の、いかにも靜かで、また大樣な趣があつて、優しく懷かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は曾て、北海道の森林で時雨に遭つた事がある。これはまた人跡絕無の大森林であるから、その趣は更に深かつたが、そのかはり、武藏野の時雨の、人懷かしくさゝやくやうな趣はなかつた。

大樣な趣

(一)東京市中野區。
(二)東京市澁谷區。
(三)東京市世田谷區。
(四)東京府北多摩郡、櫻の名所。

星斗闌干

秋の中頃から冬の初、試に中野(一)あたり、或は澁谷(二)、世田谷(三)または小金井(四)の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の足を休めてみよ。これ等の物音の忽ち起り忽ち止み、次第に近づき次第に遠ざかり、頭上の木の葉が風なしに落ちて微な音を立て、やがてそれも止んだ時、自然の靜粛を感じ、永遠の呼吸の身に迫るのを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて星斗闌干とさえた時、星をも吹落しさうな木枯が凄じく林を渡る音を、自分は屢〻日記に書いた。風の音は人の思を遠くにさそふ。自分はこのもの凄い風の音の、忽ち近く忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひ

冬枯の武藏野

(一)幕末の國學者。周防國岩國の人。文久二年(一八六二)歿、年八十一。

續けた事もある。熊谷直好の歌に、

夜もすがら木の葉片よる音きけば
しのびに風のかよふなりけり

といふのがある。自分は山家の生活を知つてゐながら、この歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。

林に坐つてゐて、日の光の最も美しさを感ずるのは、春の末から夏の初で、その次は黃葉の季節である。半ば黃色く、半ば綠な林の中を歩いてゐると、澄渡つた大空が梢々の隙間からのぞかれて、日の光は風に動く葉末々々に碎け、その面しさは言盡されぬ。日光とか碓氷とかいふ天下の名所はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が隈もなく染つて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つのも、特異の美觀ではあるまいか。

——武藏野——

(一)評論家。明治十九年(二五四六年)千葉縣に生れた。

自給自足

(二)千葉縣(上總國)君津郡湊町。

一一　今昔さま〳〵

石井滿

今と昔とでは、社會の各方面に大變な相違がある。舊幕時代には、加賀の米に就いて、「大阪の人は、加州米と言へば殊の外惡い米で、口に入れゝばぐしや〳〵して、一向膏のない米であると思つてゐる。然るにその產地の加賀に來て見れば、加賀は天下第一の肥沃の地で、米も上等である。大阪の人が加州米は惡いと思つてゐるのは、加州藩にむづかしい規則があつて、なか〳〵土地の米を外へ出さず、僅かに惡い米を大阪へ出すからだ」と言はれたものである。これは、農民が自分の食べる物を自分で作るといふ、自給自足の生活をしてゐたばかりでなく、一つの藩もまた、その領分內で自給自足の經濟を立てゝゐた結果である。

今日の有樣はこれと全く違つてゐる。私の(一)鄕里の房總の海岸に

移出する
まぐろ(鮪)

行つて見ても、よい魚は大概東京や横濱へ移出されてしまつて、土地には餘り殘らない。卽ち房州のまぐろを、房州人はその土地で食べられないといふ有樣である。旅先から北海道や靑森の林檎、山形や福島の櫻桃などを東京へ送る人が、よく「その土地の名物を買つて送るのであるから、値段が安くていゝ贈物であると思はれては困る。この頃は、名產の出る地方に來ても、小賣値段は必ずしも東京より安いとは言はれない。それだから、こちらの好意を贈るといふ意味に解してもらはなければ、せつかく手數を掛けて送つても、何にもならない」と言ふ。彼と此、誠に面白い對照ではないか。

加州藩がしたやうに、禁令を作つて領內の產物を他の地方へ積出す事を制限した時代が過ぎて、その土地の產物を多く他の地方へ賣出すやうになつた後でも、荷物を運送する設備が十分に發達してゐない爲に、日本內地に於てすら、なか〳〵不自由な事が少く

なかつた。

沖の暗いのに白帆が見える
あれは紀ノ國蜜柑船

といふ俗謠を見るがいゝ。

元來、紀州は蜜柑の本場である。或年の事、この國では蜜柑の出來が殊に良かつた。冬になると、大きな樽に入れた蜜柑は到る所山程積まれてあつて、値段と言へば殆ど捨値も同樣であつた。それに引替へて、江戸では海上の暴風の爲に、何所からも蜜柑が入つて來ない。それが爲に、年中行事の鍛冶屋のふいご祭が出來ない。それを見て取つた紀ノ國屋文左衞門といふ男が、決死隊ともいふべき船頭たちを一艘の船に乘込ませ、捨値も同樣の蜜柑を江戸まで運んで來た。思懸ないこの蜜柑の入荷に、八百八町の鍛冶屋さんたちは非常に喜んだ。負けぬ氣の江戸つ兒の常として、先を爭つてその蜜柑を

ふいご（鞴）

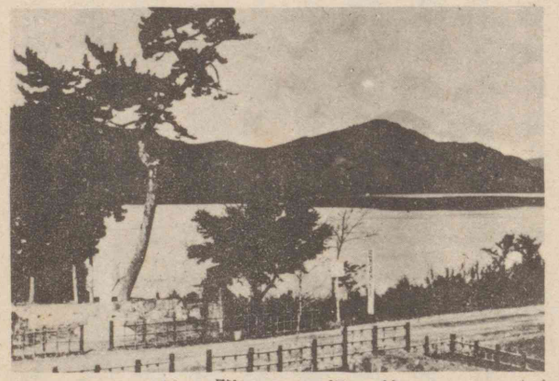
(一)江戸時代の豪商。五十嵐氏。紀伊の人。享保十九年（一七三四年）歿、年六十六。

入荷

買つたので、文左衞門は莫大な利得を獲た。まるで夢のやうな話ではないか。

かの明暦(一)の大火の後には、江戸では材木が不足して非常に困つたので、利に敏い商人中には、逸速く木曾まで買占に行つた者さへあつたが、大正の大震火災の後には、東京は却つて材木が有餘つて困つたやうな次第であつた。

明治初年の東北の飢饉に死んだ人は隨分多かつたが、大正の大震火災の時には、玄米飯をたべるのも三四日で濟んで、やがて各方面から食料品が速に供給された。その救恤品は獨り日本內地からばかりではなく、遠い外國からも可なり敏速に送られ



箱根の關址

(一)明暦三年（一六五七年）正月江戸に起つた。振袖火事ともいふ。

救恤

記憶に新た

(一)神奈川縣（相模國の川。富士東麓山中湖に發し、桂川、相模川となり相模灣に注ぐ。
(二)山梨縣の笛吹、釜無、早の三川が合流して南下し、駿河灣に注ぐ。
(三)靜岡縣（駿河國）の北境、安倍峠に發し、靜岡市の西を過ぎて駿河灣に入る。
(四)靜岡縣（同國）いはら庵原郡の西で興津の川。駿河灣に注ぐ。

た事は、まだ私どもの記憶に新たなところである。

人の移動といふ方面に就いて見ても、遠い昔は姑く措いて、德川時代の交通は、非常に面倒な事になつてゐた。その理由も色々あり、第一には、戰爭の都合からでもあつたらうが、各街道に關所を設け、旅人が其所を通過するには必ず手形を要し、忍んで關所を通過する者は重追放に處せられ、脇路を越した者は直ちに磔刑に處せられた。また東海道の諸川中、馬入(一)、富士(二)、安倍(三)、興津(四)、大井などの川々には故らに橋を架せず、舟も置かなかつたので、旅客は川越の人夫の肩か輦臺に乘つて渡る外はなかつた。一たび大雨が降つて川水が增すと、忽ち川止となつて行旅は停滯し、その混雜と迷惑とには、實に名狀し難いものがあり、江戸三百年の間、茲に演ぜられた悲劇も、隨分多かつたやうである。

箱根八里は馬でも越すが

人足拾人馬拾疋江戸より勢州まで出すべく候是は伊勢上人罷り歸り候時下され候者也
慶安四年六月廿一日
傳馬宿中

越すに越されぬ大井川

といふ俗謠が、よく當時の狀態を說明してゐる。

が、その箱根の關所も、またなかく厄介なものであつた。箱根の關所は、諸大名の證人として江戸に置いてある妻子が國元へ脫出するのを防ぐ事に力を注いだ。隨つてその取締は頗る嚴重であつて、通行の際は一々手形などを調べたものである。

傳馬朱印

德川幕府の初期に於ける我が國の交通の幹線は、東海道、中仙道、日光街道、奧州街道、甲州街道の五つの外、中國、山陰、南海、その他の交通路であつた。これに、それ〳〵驛、宿場があつた。當時東海道に於ては、各驛の人夫百人、馬百匹、中仙道は五十人、五十匹を常に備へて置かせ、それでも足りない時には、

驛の近隣の諸村から助を借りた。これが驛傳の制度で、「宿次傳馬」と言つたが、この常備の人夫や驛馬による運送には、無賃のと、さうでないの(これは規定賃錢と相對賃錢とに分たれる)とあつた。無賃で運んだのはお上の御用の物で、幕府の朱印證文を有する物に限るとされてゐた。しかし、お上の物でも賃錢を支拂つたのもある。その外の品物を運送してもらふのに、定賃か相對賃錢かを支拂つたのは言ふまでもない事で、家康が幕府を江戸に開いた翌年の慶長九年に、既に官道の賃錢を一里十六文とし、私道では適當な增賃を取らせた。

この規定賃錢は、その時々の物價の高低に應ずる爲に屢〻變更された。またその需要が多いので、增賃錢を請求するやうな良からぬ者もあつた。それで、不當な賃錢の請求を禁じ、犯す者は嚴罰に處するやう、幕府から令した事もあつた。

(一)第百七代後陽成天皇の御代。(一二一六四年)

昔の旅がいかに困難であつたかといふ事は、「かはい兒には旅をさせよ」とか、「旅は道連、世は情」とかいふ言葉でもわかる。

(一)延喜式によれば、相模國から京都まで上り二十五日、下り十三日、武藏國から京都まで上り二十九日、下り十五日とある。當時の標準速力は、馬が一日凡そ十一里、歩行は八里餘であつた。かの能因法師の

都をば霞とともに立ちしかど
あきかぜぞふく白河のせき

といふ歌にもある通り、春霞都門を出で、秋風白河に入ると言つたやうな譯で、當時の人には、日本六十餘州は可なり廣大な土地のやうに思はれた事であらう。況や親の敵討などで、あてどもなく唯一人の仇の行方をぶら〳〵と搜し廻るのは、全く氣の長い事であつた。それ故、芭蕉の「奥の細道」のやうな文章も、また(二)十返舍一九の(三)東海

(一)第六十代醍醐天皇の延喜年間(一五六五年)に藤原時平等の官制儀式を撰ばしめられたもの。

(二)江戸時代の小說家。本名は重田貞一。天保二年(一八三一年)歿、年六十七。

(三)一九の有名な小說「滑稽本」で、滑稽洒脫の彌次郎兵衛と北八との兩人が、品川を上かつて東海道を大阪に著くまで中演ずる樣々の失敗や滑稽を書いたもの。

道中膝栗毛」のやうな文學も、旅から得られた譯である。

昔の街道と言へば、松並木が連なつて、掛茶屋がちらほらしてゐた。其所に毛槍挾箱、大名の行列が通る。馬の鈴を鳴して驛傳の者が行く。伊勢參宮や京上りの商人が往來する。まるで繪卷物に見るやうな優長千萬なものがあつた。

大名行列（安藤廣重筆）

また他鄕から故鄕へ便りをするのは、大變な事であつたに相違ない。それは飛脚によつて行はれた。飛脚業の最初は、手紙を運ぶ事が主な仕事であつたが、次第に發達して、金錢も取扱ふやうになつた。

その飛脚の出る回數も、初は三度飛脚と言つて、江戸、京都、大阪の間を月に三度往來したものだが、それが次第に增加して、[1]寛保元年頃には、月に三十回以上も出るやうになつた。しかしその速度は、大阪、江戸の間を五六日間要したやうである。

それが、今ではどうであらう。京都から更に四十三キロメートル餘りの彼方なる大阪へと、東京驛頭を發する汽車には、快走僅かに八時間で到り得る超特急列車さへあつて、車內の設備や乘客の待遇などに就いても、眞に移動ホテルの觀がある。蓋し現今に於て、最も快適で、また最も安全な旅は、これを推して第一とすべきであらう。

しかし、いはゆるスピード時代にふさはしい物は、何よりも飛行機でなければならない。かの旅客機は、氣象の上に障碍を見ない限りは、日々定時にこゝらの空を飛んで、昔の海道筋を俯瞰しながら、箱根山、大井川の險難を物ともせず、[2]木曾の長江に一縷の銀線を喜

[1]櫻町天皇の御代。（二四〇一年―二四〇三年）

移動ホテル

俯瞰する

[2]木曾川のこと。

び、鈴鹿の白雲に高く翔れば、東京、大阪間は凡そ二時間餘を費すに過ぎない。

若し道路が到る所完全になれば、自動車の旅も、昔の五十三次を二日で走り得て、現代的慰樂を人々に與へるに十分であらう。それにしても移り變つた世情ではないか。

——鐵道讀本——

自修文

自製の英雄たれ

津村秀松[1]

人間は誰しも、その志す所に成功する事を希望せぬ者はない。しかし、この頃の世の中は、成功どころか、一通りの生活をする事すらなか〳〵容易でない。然るに今の青年の中には、その志すところに樂々と成功する事を念とするかに見える者が決して少くない。

[1] 實業家。法學博士。明治九年（二五三六年）兵庫縣に生れた。

第一人者　最もすぐれた者。
氣魄　氣力。　氣象。

一體今の世の中で、樂々と成功しよう、無難に出世しようなどといふ考程間違つた考はない。日本の事だけで考へてみても、本國だけで同胞既に六千九百萬、大日本になると人口無慮九千萬以上だ。このやうに數多い同胞兄弟のうちから、誰彼と人に言はれる程の人物になる事は、一通りの苦勞や努力で到底出來ようはずがない。人並の努力では、結局、人並の人間になるより外はない。常人の爲す能はざる所を爲してこそ、始めて常人以上になり得るのだ。將來世の中に頭を出さうと切々勉强してゐる學生だけでも何百萬人とある。これが皆お互にお互の競爭者だ。世界全體の上では、その數は更に數十倍するであらう。これだけの大敵を前後左右に控へて、その志す方面の第一人者と成らうといふには、通常人の不可能とする事を可能とするくらゐの氣魄と努力とがなくてはならぬ。學資があつて學問する。父兄があつて他鄉に遊學する。氣候の良い所で仕事をする。便利な所で商賣をす

敢行する　おしきつて行ふ。

教鞭を取る　學生を教授する。

る。……こんな事は誰にでも出來る事だ。誰にでも出來る事をしただけでは、普通の結果しか得られないのは當然ではないか。普通の事以上の事を敢行してこそ、始めて人並以上の成功を期待する資格が生ずるのだ。

今から十數年も前の事、私が今の神戸商業大學に教鞭を取つてゐた時、毎年の卒業式に當つて、よく次のやうな事を述べては、告別の辭に代へた。

今日は誠にめでたい卒業式であるが、諸君に對する學校の卒業式は、實は諸君に取つての社會の始業式なのだ。學校はこれまで諸君に對して、唯一通り豫備知識を與へたに過ぎぬ。書物の上の學問なり勉强なりでも、今日を以て終りを告げたのだと思つては大きな間違だ。社會へ出てもなほ引續いて書物を讀み、勉强をせねば、せつかく學校が與へた豫備知識が何にもならぬ。學生時代と違つて、勤人（つとめにん）となれば、恐らく暇がなからう。

それでも朝は人並より早く起き、夜は人の寢る時間を盜んで、せめて自分が勤めてゐる所の會社なり銀行なりに關する書物や專門の雜誌だけでも、必ず目を通すといふ心懸がなくてはならぬ。……

と。ところが、その頃の卒業生が今も時々遊びに來るが、雜談の間に、卒業當時の事を思ひ出しては、よくこんな事をいふ、

私どもが卒業する時に、先生の御教訓もありましたが、さて愈、會社、銀行に勤めてみますと、激しい一日の働ですつかり疲れ切つてしまつて、とても書物や雜誌を讀むなどといふ時間も根氣もありません。

それに對して私は常にかう答へてゐる、

それはその通りに相違ない。恐らく會社や銀行の仕事は、君等に朝早く、夜晩く讀書し研究する餘裕と勇氣とを殘させまい。だから、自分の言つた事は確かに無理なのだ。人並では出來ぬ

事なのだ。しかし、人並に出來る事をするだけなら、人並の出世で我慢する外はないではないか。人間の出來ぬ事をせよとは言はぬが、人間の出來る最大限度までの努力を盡さねば、人間最大の出世が出來ぬ道理ではないか。

私が曾て學窓にゐた頃、教科書としてフランクリン(一)の「自敍傳」を讀んだ。これは徹頭徹尾「僞らざる告白」である。世の中に「僞らざる告白」を書き得る人が、果して幾人あらうか。私は先づこの事に感服した。次には「僞らざる告白」即ち眞の自敍傳を書き得る人があるにしても、これ程立派な「人間努力」の内容を整へ得る人が、果して幾人あらうかといふ事に感服した。そしてこの二つの感服が、今もなほ私の心にしつかと銘せられてゐる。

フランクリン

小學校も卒へず、中學校にも入らず、正式の教育は何一つ受け

(一)アメリカ合衆國の政治家、外交家。(西紀一七〇六年―一七九〇年)

徹頭徹尾　始から終まで一貫すること。

銘せられる　きざみこまれる。

得なかつた一移民の貧兒が、開墾日なほ淺いアメリカで印刷屋の小僧になり、植字(しゅくじ)手傳の傍ら、夜を日に繼いで勉強した事が土臺になつて、一代の大政治家となつて副大統領になり、殊に一大科學者となり、一大發明家とまでなつたフランクリンは、全く自製の英雄であり、徹頭徹尾、自力獨學の大學者である。私は、ナポレオンにも、ビスマルク(一)にも餘り感心せぬ。ワシントン(二)などに至つては尚更の事だ。それでゐて、古今東西の英雄豪傑のうちで、リンカーン(三)と並べてこのフランクリンを最も強く崇拜(すうはい)するのは、それが時運といふ手傳や、天才といふ素質はさう多分になくとも、勉強と努力と修養次第で、必ず人間の到達し得る範圍の英雄豪傑になり得る事を、身を以て示したからである。

――新興日本大熱辯集――

植字　活字を組んで版にすること。

(一)ドイツの政治家。鐵血宰相の名がある。(西紀一八一五年―一八九八年)

(二)アメリカ合衆國獨立の元勳。初代の大統領。(西紀一七三二年―一七九九年)

(三)アメリカ合衆國第十六代の大統領。(西紀一八〇九年―一八六五年)

(一)鎌倉時代初期の歌人。

(二)平安時代の歌人。越前守大江雅致の女。

山さとはまつの聲のみきゝなれて
かせふかぬ日はさびしかりけり　蓮月

(三)京都市左京區岡崎。

(四)幕末の尼僧、俗名誠。歌人。京都に住んだ。明治八年(一八七五)年八十五。寂。

一二　冬の山里

木の葉ちる宿はきゝわくことぞなき
　時雨する夜も時雨せぬ夜も　　源(一)賴實

さびしさに煙をだにも絶たじとて
　柴をりくぶる冬のやま里　　和泉式部(二)

太田垣蓮月筆蹟

冬畑の大根の莖にしもさえて
　あさとでさむし岡(三)ざきの里　　太田垣蓮月(四)

神無月ふりみふらずみ定めなき
　しぐれぞ冬のはじめなりける　　よみ人知らず

月前郭公

さやかなる月ゆゑたにもぬられぬを山ほとゝきす鳴夜なりけり　景樹

てる月の影の散りくるこゝちして
　よる行く袖にたまる雪かな　　香川景樹

香川景樹筆蹟

こまとめて袖うちはらふ蔭もなし
　佐野のわたりの雪のゆふぐれ　　藤原定家

きのふといひけふと暮して飛鳥川
　ながれて早き月日なりけり　　春道列樹

(一)吉野朝の忠臣。正平九年(二〇一四年)歿、六十三。
(二)延元元年(一九三六年)五月。
(三)足利尊氏。正平一十三年(二〇一八年)歿、五十四。
(四)第九十六代後醍醐天皇。
(五)恆良親王。後醍醐天皇の第六皇子。延元三年(一九三八年)薨、十八。
(六)藤原實世。平年五十三年歿、正十一。
(七)新田義貞。延元三年戰死、十八。

一三　吉野の行宮

北畠親房

五月にもなりぬ。高氏等西國の兇徒を相語らひて、重ねて攻上りぬ。官軍利なくして都に歸り參る程に、同二十七日また山門に臨幸し給ひけり。八月に至るまでたび〳〵合戰ありしかど、官軍進まざりき。

十月十日の頃にや、主上山門より還幸。いとあさましかりし事どもなれど、なほ行末を思し召す途ありしにこそ。東宮は北國へ行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をはじめて、さるべきつはものも數多仕うまつりけり。

同十二月に忍びて都を出でましまして、河内國に正成といひしが一族を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ふ。もとの如く在位の儀にてぞましける。内侍所も遷らせ給ひ、神

(一)源顯家。北畠親房の子。延元三年戰死、年二十一。
(二)義良親王。後の第九十七代後村上天皇。
(三)今大阪府泉北郡。堺市の南。
(四)「もろともに苔の下には朽ちずしてうづもれぬ名を見るぞ悲しき」(金葉集、和泉式部)

璽も御身に隨へ給ひけり。誠に奇特の事にこそありしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起すやからもありき。臨幸の後には國々にも御志あるたぐひ數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。

石清水八幡宮

またの年戊寅の春二月、鎭守府大將軍顯家卿(一)また親王(二)を先だて申し、重ねてうち上りぬ。海道の國々を悉く平げて、伊勢、伊賀を經て大和に入り、奈良の京になん著きにける。それより所所の合戰數多たび、互に勝負ありしに、同五月和泉國石津(三)といふ所にての戰に、時や到らざりけん、忠孝の道此所にて極りにき。苔(四)の下にもうづもれぬ物とては、唯徒に名をのみぞ留めし。心うき世にもありしかな。官軍なほ心を勵ま

(一)京都府綾喜郡の西北にあつて、その山上に石清水八幡宮がある。

言ふばかりなし

(二)源顯信。正平年中戰死。

節度

儲の君

して男山に陣を取りて、暫く合戰ありしかど、朝敵忍びて社壇を燒拂ひしより、事成らずして引退きぬ。北國なる義貞も、たび〳〵召されしかど上りあへず、させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、言ふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子また東へ向はしめ給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敍せられ、陸奥介鎭守將軍を兼ねしめて遣されぬ。東國の官軍悉くかの節度に從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ひて、「道の程もかたじけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ」となん申されし。異母の御兄も數多ましましき。同母の御兄も前東宮恆良親王、成良親王ましますに、かく定まり給ひぬるも、天命なればかたじけなし。七月の末つ方伊勢へ越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月の初め纜を解かれしに、十日

おどろ〳〵し

(一)伊豆半島の最南端の一角。一名石廊崎。

(二)愛知縣(尾張國)知多郡の篠島。

(三)霞ケ浦。

めづらか

こはし

(四)左中將道世。

餘りの事にや、上總の地近くより空の氣色おどろ〳〵しく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方に漂はれたるに、いとゞ波風夥しくなりて、數多の船行き方知らずなりにけるに、皇子の御船のみは障なく伊勢の海に著かせ給ひぬ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風の紛れに、東をさして常陸國なる內の海に來著きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西へ吹分けられぬ。末の世にはめづらかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居もいかゞと覺えしに、皇大神の止め申させ給ひけるなるべし。後には吉野に入らせましまして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひければ、いとゞ思ひ合せられて、尊くもありしかな。また常陸はもとより心ざす方なれば、御志ある輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奧州、野州の守も次の春重ねて下向して、各國に就きにき。

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧におかされさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。(一)ぬるがうちなる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、かず〳〵目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の迹さへ滯りぬ。かねて時をも覺らしめ給ひけるにや、前の夜より親王をば左(二)大臣の第に遷し奉られて、三種の神器を傳へ申されぬ。後の號をば、仰のまゝにて後醍醐の天皇と申す。

昔仲(三)哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神去りましましき。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎭められて、胎(四)中の天皇の御代に定まりき。この君聖運ましましかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく德もなきぬすびと世に起りて、四年餘りが程宸襟を惱まし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末空しくありなんや。今の御門また天照大神よりこの方の正統を受けましま

(一)「ぬるがうちに見るものをのみは夢といはんかはかなき世をもうつゝとは見ず」(古今集、壬生忠岑)
(二)藤原經忠。正平七年(一三〇一)、一二年(一三五二)歿、年五十一。
(三)第十四代。
(四)第十五代應神天皇。
宸襟
(五)後村上天皇。

しぬれば、この御光に爭ひ奉る者やはあるべき。なか〳〵かくて靜まりぬべき時の運とぞ覺ゆる。

—神皇正統記—

一四　最後の參内

さても今年兩度の合戰に、(一)京勢(二)むげにうち負けて、畿內多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍(三)、左兵衛督(四)の周章、唯熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢なんどを向けてはかなふべしとも覺えずとて、執事高(五)武藏守師直(六)、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀(七)、八幡(八)に著きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍弟正時一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資(九)を以て申しけるは、父正成、尪弱の身を以て大敵の威を碎

(一)正平二年(一三〇七年)八月の河內國(大阪府)藤井寺の合戰、同じく十一月の攝津國(大阪府)住吉阿倍野の合戰。
(二)足利勢。
(三)足利尊氏。
(四)弟直義。
(五)師重の子。
(六)師直の弟。
(七)山城國久世郡にある。(今の京都府淀町)
(八)同國綴喜郡。(今の京都府八幡町)
(九)藤原氏。男山で戰死した。
尪弱

(一)第九十六代後醍醐天皇。

有待の身

雌雄を決す

き、(一)先朝の宸襟を安め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるによつて、遂に攝州湊川にて討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戰の場へは伴なはで河内に歸し、『死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に卽け參らせよ。』と申し置きて死して候。然るに正行、正時既に壯年に及び候ひぬ。このたび我と手を碎き合戰仕り候はずば、且は亡父の申しゝ遺言にたがひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕る事候ひなば、唯君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、このたび師直、師泰に駈合ひ、身命を盡し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に取られ候か、その二つのうちに戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の

傳奏

(一)第九十七代後村上天皇。

とかくの敕答に及ばず

龍顏を拜し奉らん爲に參內仕つて候」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に現れければ、傳奏未だ奏せざる前に、先づ直衣の袖をぞぬらされける。

(一)主上乃ち南殿の御簾を高く卷かせて、龍顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返すゞも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰、天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とするところなれば、今度の合戰手を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後(しりへ)を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし」と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの敕答に及ばず、唯これを最後の參內なりと思ひ定めて退出す。

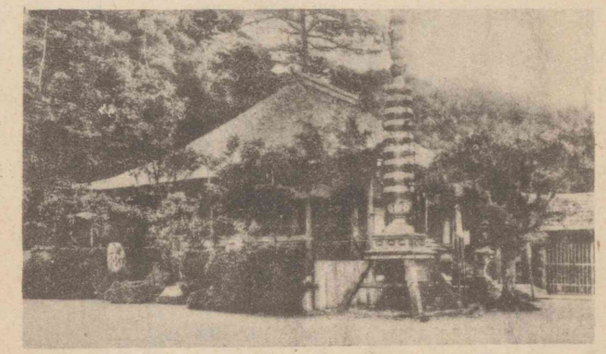
如意輪堂　伊藤龍涯筆

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四郎子息二人、楠木將監以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書列ねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞ留むる

と一首の歌を書留め、逆修の爲と思しくて、各鬢髮を切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向ひける。

——太平記——



如意輪堂

(一)大和國(奈良縣)吉野郡吉野山如意輪寺(淨土宗)の内にある。

逆修

(一)歴史家。元臨時帝室編修局編修官。明治十年(二五三七年)長岡市に生れた。

身を鋒鏑に暴す

(二)第十代。

(三)北國は大彦命、東海は武渟河別命、西海は吉備津彦命、丹波は丹波道主命。

一五　國難と皇室

渡邊幾治郎(一)

一國の危急存亡や、國民の榮辱死生に關した國難に際し、御歴代の天皇が全く御身を以て解決の衝に當らせられた烈々たる御精神と御功績とは、國民の何人も感動せずにはゐられないところである。

神武天皇（橋本雅邦筆）

神武天皇の御東征の時には、天皇は御身を鋒鏑にお暴しになり、皇兄五瀬命は長髓彦との戰にお傷はしくも戰死なされた。(二)崇神天皇が天業經綸の大志を懷いて、大規模の邊土拓殖を行はせられようとして、いはゆる四(三)道將軍を四方に派遣なされた時、選ばれた四人の將軍は、何れも天皇の御叔父や御甥などの皇族であらせられた。次

いで日本武尊は十六歳の少年で、女裝して熊襲の本陣に侵入して、その巨魁を誅せられたが、後更に東國を征して、陣中に薨ぜられた。神功皇后は女性の御身を以て、海を航して遙かに新羅を征伐あそばされた。その時皇后は群臣に告げて「征伐は國の大事である。若しこれを汝等に任せて、事が敗れる時は罪は汝等に歸する。これは誠に傷むべき事である。私は女であるから、男裝して征伐に從はう。若し事が成就すれば汝等と功を共にし、敗れたら獨り罪を受けよう」と仰せられたので、群臣は大いに感激したといふ。神功皇后の外征は、かゝる尊い御精神を以て行はれたのである。

上古、天下に事があれば天皇の親征し給ふを常とし、然らざれば皇子か皇后がこれに代られるのが例であつた。政權が武門に移つても、その御精神には變化がない。故に龜山上皇[1]は元寇の難に際し、征伐は武士にお任せになつたが、御身を以て國難に代らうと、大神

(1)第九十代。

宮に祈らせられた。

世の爲に身をば惜しまぬ心とも
あらぶる神は照しみるらん

龜山上皇（高橋廣湖筆）

とは、この烈々たる御壯心を歌はせられた御製である。後醍醐天皇が北條氏を滅して建武中興の世を開き、次いで足利尊氏に苦しめられ給うた時、天皇と終始艱苦を共にせられたのは、護良親王以下の皇子方であつた。そして護良親王は鎌倉に弑せられ給ひ、天皇は北闕を望んで吉野に崩御あそばされた。宗良親王もまた諸國に轉戰して、朝家の爲に盡させられたが、

末造

君のため世のため何か惜しからん
すてゝかひある命なりせば

と、凜々たる犧牲的精神を示された。

江戸幕府の末造、外艦が渡來して開港を迫り、天下紛々として定まらなかつた際、孝明天皇は深く宸襟を惱ませられ、幾度か御寢食を減じて神に祈らせられた。宸慮の深かつた事は、實に想像の外である。天皇の御製に

すまし得ぬ水に我が身は沈むとも
にごしはせじな四方のたみ草

とあるのは、實に有難い大御心である。明治天皇は御在位四十六年、一日の如く政治に御精勵あそばされた。日清戰爭には大本營を廣島に進め、九箇月の間いと狹き御室に起臥せられて、軍務に御盡瘁あらせられた。侍臣が備へ附けようとした長椅子やストーブをす

國民と休戚を分つ

ら、陣中にはないからと仰せられて、用ひさせられなかつた。その兵士と艱苦を共にし、國民と休戚を分たせ給うた偉大な犧牲の御精神は、古名將、聖主と雖も、及ばないところである。

廣島大本營に於ける明治天皇（南薰造筆）

かくの如く、國難に遭つては天皇、若しくは皇后、皇子が御身を以てこれに當り、國家を率ゐさせられた事は、古今に亙つて變らぬ我が皇室の御本領である。さうしてこれによつて、我が國はいつも國難を脱して、今日の進歩發展を遂げる事を得たのである。

明治天皇の御製に

天つ神さだめたまひし國なれば
　わが國ながらたふとかりけり
千萬の神もひとつにまもるらん
　あをひと草のしげりゆく世を
千早ぶる神のかためしわが國を
　民とともにも守らざらめや

とある。かうした御信念を以て、天皇は國民と共に國を守らせ給ふのである。今や社會問題の解決を欲し、國民生活の安定を冀うて、ともすれば却つてこの祖國を忘れ、聖帝の大御心を顧ないやうな者のあるのは、誠に過まれるもまた甚だしいものではあるまいか。

——皇室新論——

(一)政治家、俳人、青嵐と號する。拓殖大學々長、貴族院議員。明治九年(二五年)(三六年)兵庫縣に生れた。

一六　自ら助くる者

(一)永田秀次郎

昔時秦の始皇帝が六國を滅して天下を統一し、阿房宮を造つて驕奢を極めてから、俄に死ぬ事が厭になり、不老不死の藥を海内に需めたが、生憎と急に見附からないうちに、南方旅行中病氣に罹り、聖壽漸く五十にして崩御した。帝はまた易姓革命を厭つて、秦の天下を萬世に傳へる事を希望し、自分を始皇帝と言ひ、子孫が第二世第三世より萬世に至るべき事を定めたが、皮肉にも帝の崩御後僅かに三年にして二世皇帝がその臣の爲に弑せられ、四年目には三世皇帝が漢の高祖に降參して、秦の國が滅びてしまつた。秦の始皇と言へば、支那第一の豪傑と言はれる人であるが、その豪傑が、天下の權力を以てしても、やはり正當の道を蹈まないで無理な注文をする事は、全くだめであるといふ事を、痛快に教へてくれた。ソロモンが一代の榮華も、竟に野生の百合に如かず。これでこそ神樣が、我に取つて有難いのである。

(一)西紀前二一〇年。易姓革命

(二)劉邦。

(三)新約聖書マタイ傳第六章第二十九節。ソロモンは昔西部アジヤ(今のシリヤ)南西にあつたイスラエル王國第三代王。その政治はイスラエルの全盛時代であつた。(西紀前一一〇三年—九七〇年)

然るに世の青年の中には、往々秦の始皇にも劣らぬ無理な注文をする者がある。自分が勉強せずして立身出世を望んでみたり、或は自分が努力せずに、鄉里の先輩の引立によつて、一足飛に好位置を得る事を考へたりする。かくの如き事を夢みる者は、恰も權力も智力もない始皇の模造品が、立身出世の仙藥を需めるやうなもので、實に憫むべき話である。世の中には、一等の富籤を當てゝみたいと、夢のやうな事を考へてゐる人もあるが、かやうな都合の好い注文をつける人を、西洋の諺では、燒鳥が口の中に飛んで來るのを待つ人とか、または雲雀を捕へようとして天の落ちるのを待つ人とか言つてゐる。

故に私は茲に青年に告げたい。諸君等の立身出世には、何等の妙法がない。唯自ら助くるあるのみである。自ら勉強し自ら努力して、自己の運命を開拓する外に、出世の妙藥はないのである。立身には

奇功を奏する

愚かな巧妙

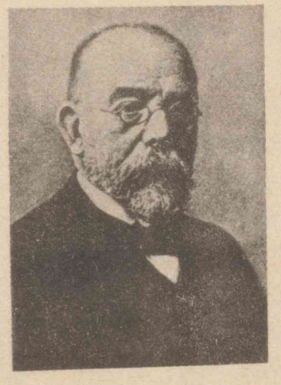
妙法なし。先づこの一語を信ずる事が、立身の第一歩であつて、そしてまた立身の最後の祕訣である。

古人も「凡そ事の成るは、成るの時に成るにあらずして、必ず由つて來るあり。」と說いてゐるが、西洋では「神樣の辭書には偶然といふ文字なし。」と言つてゐる。何事をも知つてをられる神樣の眼には、別に偶然とか不思議とかいふ事はない。すべて當然の原因のある所に、當然の結果が生じてゐるのみである。よく怠惰な學生が、平素勉强もせずにゐながら、試驗間際に徹夜の勉强をしたり、または巧に試驗問題を推測して、僅かの勉强で奇功を奏する事を考へたりする。世間にもまた往々、平素注意さへすれば、何事もなく濟むべき事をうち棄てゝ置いて、事件が發生すると俄に狼狽し、刀の刃を渡るやうな藝當を演じて巧に危險を免れ、得意顏をしてゐる者が多い。この種の巧妙は、實に愚かな巧妙である。青年の學ぶべき事は、この

賢い平凡

やうな愚かな巧妙ではなくて、賢い平凡でなくてはならぬ。

圍碁の格言に「名人に妙手なし」といふ事がある。卽ち名人は常に正々堂々一手をも忽にしないから、自然の大勢で平々凡々に敵に勝つのである。故に妙手を出して奇功を奏する必要がないのである。



嘘ッホ

嘗て我が國に(一)ペストが流行した。その時ドイツから有名な醫者コッホ(二)博士が來朝した。我が國の朝野の人が擧つてこれを歡迎して、謹んでその敎を請うた。博士は種々研究した結果、敎を垂れて曰く、

「ペストを豫防するには、鼠を退治するのが近路である。凡そ生物を退治するには、その生物にうち勝つべき他の生物を蕃殖せしめるにある。故に鼠を退治するのは、猫を飼養するにある。」

(一)黑死病。

(二)細菌學者。病原バクテリヤ研究上の功績多く、結核菌、コレラ菌等を發見した。(西紀一八四三年—一九一〇年)

との事であつた。私は當時地方の警察部長として防疫に從事してゐたので、成程眞理は平凡なものであると、大いに感心した。

これに似た話は昔もある。嘗て江戸時代に永井信濃守尙政が老中となつた時に、井伊直孝に敎を請うた。直孝は容易に敎へない。遂に齋戒沐浴七日の後に、烏帽子直垂の大禮服を著用して、謹んで再び敎を請うた時に、直孝は端然としてこれに告げて言ふ「唯油斷大敵の四字を忘るな」尙政もまた深く感謝して退出したといふ。私はこの物語を聞いた時も、また成程眞理は平凡なものであると思つた。

眞理は常にかくの如く平凡なものである。故に若し世の青年が、眞に立身に妙法なしといふ一事を、心肝に銘して奮起するならば、この一事既に諸君を成功に導くに足るのである。先づその依賴心を去れ。決して妙法を求めるな。そして唯平凡な眞理の道を歩め。平

(一)德川氏の世臣。直勝の長子。關ヶ原役、大阪夏の陣等に功あり、山城淀城に封ぜられ十萬石を領した。(二)寬文八年(一六六八年)歿、年八十二。

(二)德川氏の世臣。直政の第二子。大阪冬の陣、江戸近郊彥根城に封ぜられ、夏の陣に殊功あつて加封され三十萬石を領した。(二)治二年(一六六二年)歿、年七十一。

恃むところは唯我あるのみ

(一)フランスの小說家。(西紀一八〇二年―一八七〇年)

凡な眞理の道とは何であるか。唯努力である。我の眞に恃むところは唯我あるのみである。

(一)アレキサンダー・デューマ曰く、

「我を救ふ者は何所にありや。曰く、爾の側にあり。これを知らずして他に求むれば、これより難き事なし。これを知りて自ら求むれば、これより易き事なし」。

デューマ

これは面白い言葉である。眞に自己を救ふ者は、唯自己あるのみである。この一事をいかなる程度にまで深刻に理解するかといふ問題は、やがてその人のいかなる程度まで成功するかといふ問題である。若し此所に人があつて、自分の頭上に帽子を被つてゐる事を忘却して、頻りに部屋や押入を搜し廻つてゐるとしたら、天下これ程滑稽な事はあるまい。しかしながら、今日の青年にして、眞に神樣の前に立つてこの男を笑ひ得る者が、幾人あるであらうか。自分の力によつて自分を救ふ事を考へずして徒に他人に依賴し、自ら努力せずして徒に僥倖のみを冀ひ、賢い平凡な正道を歩まないで徒に愚かな巧妙の間道を走らうとする者は、すべて自己頭上の帽子を忘れて、これを部屋や押入に搜してゐる男と同一である。

天は自ら助くる者を助く。禍福門なし、唯これ人の招くところ。聖書に曰く、(一)「我を呼びて主よ〳〵と曰ふ者、盡く天國に入るにあらず唯これに入る者は、我が天にいます父の旨に遵ふ者のみなり」。禮拜ばかりでは天國に行けない。神樣の旨に遵ふ言行がなくてはならぬ。「心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らん」といふのも同じ教である。自ら努力せずしては、神樣にも救つては戴けない。況やこの世智辛い世の中に立つて、自己の運命を開拓しようと欲

(一)新約聖書マタイ傳第七章第二十一節。

する者が、いかにして他人のみに依賴して成功する事が出來ようか。

或人が米國の富豪カーネギーに致富の妙法を聞いた。カーネギがこれに答へて、「富豪となるに最も必要な條件は、貧家に生れる事である。貧乏のどん底に生れて、貧乏の苦痛を骨髄に徹して味はつた者が、腹のどん底から奮起してこそ、始めて富者となり得るのである。生れながらにして銀のさじを口に入れたやうな者が、どうして眞の富豪に成れようか。」と言つた。誠にその通りであらう。不撓不屈、堅忍努力の眞の覺悟は、艱難に遭遇して始めて得られるものであらう。王侯の家に生れた釋迦も、山中に入つて難行苦行の修養を積んで、始めて大悟したのである。

嗚呼、立身に妙法なし。眞理は平凡なり。汝を救ふ者は唯汝あるのみである。自己頭上の帽子を忘れて、これを他に搜す者は誰ぞ。

さじ（匙）

一七　毀譽

—梅白し—

三浦梅園[1]

毀譽は人の大節なり。然りと雖も世擧りて譽むるにも必ず察すべし。人擧りて毀るにも必ず察すべし。況や一人は譽め、一人は毀る事に於てをや。例へば、訟事あらんに、兩方理ありと思へばこそ互にいひ募りてやまざるなれ。これを奉行のさばかんに、とにかく一人は勝ち、一人は負くべし。勝ちたる人は奉行を譽め、負けたる人は毀るなり。また惡しき人なりとも、それに伴なふ人はこれを善しと思へばこそ交はるなれ。我が善しと思ふをば譽め、我が惡しと思ふをば毀る習なれ

[1] 江戸時代の儒者、經濟家。名は晉。豐後の人。寛政元年（一七八九年）、年六十七。

訟事

さばく（捌）

かはや（厠）

理不盡

ば、その毀譽によりてその人の善惡も分ち難し。同じ一杯の酒ながら、上戸は醉ひて面白き物なりと言ひ、下戸は醉ひて苦しき物なりと言ふ。まして人傳などに聞く人の善惡のさたは、おぼつかなき事なり。

昔、人ありて、その子を或寺へ遣し置きけるに、暫くありて逃歸り、住持の事を毀りけるは、

「我に月代剃れと言ひければ、例の如く剃りけるを、剃りやうのわきて惡しとていたく叱りぬ。また或時、我がかはやに行きけるを見て、何とてかはやへは行きし。不屆なり。向後かはやへ行くべからずと言ひ、その後、朝飯たくとて味噌をすりけるに、これも味噌をするが惡しきとて叱りぬ。すべて理不盡の次第、殆ど困却に及びたり。」

と語りけるを親聞きて、「さりとは出家にも似合はざる事なり」とて、

（一）長野縣下伊那郡小野川の谷で、古驛路にあたつてゐた。

急ぎ山に登り、右の事どもを詰りけるに、住持聞きて、

「いや〳〵、さやうの事にてはなし。常々髮よく剃る故に、この頃剃らせけるに、いたく眠りて、これを見給へ、かやうに頭へ切りこみ候。」

とて傷を見せ、

「その上、かはやも行くべきかはやへは行かで、客の爲に設けたる方へ行き、味噌も常の味噌をさしおき、客に使ふべきを使ひし故、これ等の事を返す〳〵も戒め諭しつれ。」

と言ひけるにぞ、親も理に服して、却つて罪を謝しけるとぞ。

信濃國薗原（そのはら）といふ所に木あり。遠くより見れば、はうきの形の如し。よりてこれをはゝき木といふ。されど近づきて見れば、はうきに似たる所もなく、うち繁れりとかや。遠きより見聞くと親しく見聞くとは、多くはこのはゝき木の類なるべし。凡そ人のものを批判す

るも、我が好むところを譽むるものなり。俳士に歌人の評判せさせ、日蓮宗に眞宗の評判せさせんに、いかでか公論あらん。同じ路を二人して行かんに、一人は健かにしてこの路近しと言ひ、一人は疲れて遠しと言はん。これ路に違あるにあらず、心に違あればなり。例へば、義經の事を論じて、義經を善しと思ふ人の言はんには、

「この人誠に幼より常人にてはおはしまさざりけり。俱に天を戴かざる讐を報ぜんと、夜々寺を出でて太刀打を學び、遙かに秀衡が人となりを見てこれにより、遂に飛ぶ鳥も落ちんばかりなる勢の平家を二三年のうちに攻滅して、亡父の恥辱を雪ぎ、法皇の宸襟を安め奉り、絶えたる源氏を興し、兄頼朝を天下の武將と仰がしめたり。」

と言ひ、また義經に不滿なる人は、

「成程、この人戰爭に一通り自由を得たる人ながら、恣に平時忠の

(一)時盛信等走家し家滅つ亡たの西子。海、平に宗滅ぶ後が洛上能登文治四年五年流れ（一八九）所で四十六。

女を納れ、梶原景時とせんなき口論をしたる、大將たらん人のしわざに似ず。然るを都に逃げのぼり、頼朝追討の院旨を申し受け、吉野山にて一人の靜に別れかね、兒女子の涙を絞られし。」

などと言ふ。かく、善しと思ふ人の論と、惡しと思ふ人の論とには、誠に雪と墨との差あるなり。その惡しき所を捨てゝ善き所を取る、これ人を用ふる道なり。その惡しきをば惡しとし、善きをば善しとす、これ公の論なり。また分相應につきて言ふ事あり。鼠を甚だ大なりと言ふとも、牛の小さきには及ばじ。蛇を甚だ短しと言ふとも、みゝずよりは長かるべし。故に人を善しと言ひて譽むるも、惡しと言ひて毀るも、その場合を考ふべき事なり。

——梅園叢書——

(一)國文學者、文學博士。早稲田大學教授。明治七年(二五三四年)山形縣に生れた。
(二)第四十二代。
(三)續日本紀卷一に出てゐる。

賦與される　口を衝いて出る

一八　明淨直　その一

五十嵐　力

文武天皇が御即位の際に下された宣命の中に、「明き淨き直き誠の心」といふ詞がある。我等はこの「明き淨き直き心」が、日本人の性質の核となり中心となるものであると考へる。この詞は代々の詔敕に幾度も〳〵繰返されてゐる。しかも重きを置いて繰返されてゐる。その他、古事記、日本書紀、萬葉集などにも、重々しい場合に幾度も用ひられてゐる。これは畢竟、我等の祖先が、心の中に深く感じた事、大和民族に最も濃く、最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて出たのではあるまいか。世に大和民族の特性と稱せられる現實、光明、活動、向上、中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、風雅などの諸性質は、概ねこの明、淨、直の三大性質を基本として説明されるらしく、殊に三種の神器がこの三大性質の標章として遺憾がないやうに思はれる。次に抽象的ではあるが、一通りその理由を説明しよう。

(一)古事記上卷に出てゐる。

折衷性

鏡の性は明で、その德は玲瓏透徹に物を映ずる事である。日本人は鏡のやうな明き心で正しく事物を觀た。故にその觀方は概して公平無私で、赤い者は赤いとし、黑い者は黑いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、惡行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大神は鏡を齋きて「我が大御前を見るが如くせよ」と仰せられた。全國無數の神社には、鏡が神體として齋かれてある。詔敕や、祝詞や、乃至、君臣應對の詞などに「明き心」といふ語が澤山用ひられてゐる。これ等は何れもこの性質が、我が國民の心底に根深く植附けられてゐる證據であると思ふ。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も、一面この根本性質の結果であらう。我が國には、政治、社會、宗教などの諸方面に亙つて、諸外國に見るやうな非常な大衝突はない。全くないではないが、割合に少く、またいつもそれが調和する傾が

騎虎の勢
調停
かゞり(篝)
(一)新納武藏守忠元。
(二)新納忠元の作。

ある。例へば、異主義が新たに外國からはいつて來たとする。毛色が變つてゐるので、暫くは新舊相爭ふが、やがてお互に、それには道理も無理もある事を解すると、ばからしくなつて、最早爭論が續けられなくなる。そこで、騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事がこの通りである。僅かあれだけの騒亂で明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣、父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではあるまいか。馬上に天下を得た武將が文藝の奬勵に骨折るのも、群雄割據の亂世に陣中かゞり火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じく戰國時代に

敵ぞとて何かは人の憎からん
おなじ御國のおなじ身なれば

と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡すのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、一は事を見る事が明らかであつて、理に從ふ事が流れるやうな根本性に因るのではあるまいか。大和民族は十字軍や、フランス革命のやうな極端な狂言を演ずるのには、餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を公正と言ひ、理に鋭いと言ひ、感情の平靜を保つと言ひ、何事をも受容れる胸懷の洞然たる人種であると言つた外人の批評は、あながち、でたらめの空世辭ではないと思ふ。

(一)西歐諸國がエルサレム聖地を回教徒であるトルコ人から奪ひ返した戰役。西紀一一〇七年―一二〇六年。從軍者が十字の徽章をこの名を附けたのである。
(二)西紀一七八九年佛國イ十一世の時に起つた革命。一七九二年成就し、一七九五年鎭定した。
洞然
溷濁

一九　明淨直その二

清淨の德は玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは似てゐるが、同じではない。その違ふ趣は、丁度、鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。汚穢溷濁を忌む事は、清、明共に同樣であるが、清はそれ以上に味はひのあり溫かみのある事を要する。譬へば、鏡は空白で正しく物

圓融の相
澄徹の趣

むくつけき武人
(一)梶原景季の故事。
(二)源義家の故事。
(三)木村重成の故事。

を映ずれば足りるが、玉は必ずしも空白で物を映ずる事を要しないで、溫潤の光、圓融の相、澄徹の趣のある事を要するやうなものである。

本來日本人は、明らかに事物を看る長所を有してゐるばかりでなく、外物を看るのにも、自己を發表するのにも、一種の味はひのある態度を具へてゐる。その明は空白の明ではなくて、溫潤、圓融、澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくて、水晶、夜光珠の明である。我が國では、古來、襖、被が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されてゐた。祝詞、宣命を始めとして、多くの歌詠、謠諷は明き心を現しながら、趣味、風韻に富んでゐる。しかもその趣味や形容が、諸外國、例へば支那の文字に見るが如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなく、よくその實を現し、中味に相應した修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戰陣の間に花をかざし、(一)歌詠を贈答し、(二)或は冑に香を燒き

審美眼
虚妄
首鼠兩端

しめるといふやうな嗜があつた。上流社會は言ふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれにふさはしい文字をもつてゐる。外國出稼の勞働者がその日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢を持たぬ者はなく、そしてこれは外國の勞働者に絶えて見ないところと言はれてゐる。大工、指物師の手に成るはかない家具や細工物も、西洋の表面だけ美しくて裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えない裏面にまでも手を盡すといふ嗜がある。これ等は何れも、大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではあるまいか。我等は「日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より勞働者に至るまで皆美術を愛翫す」と言つた一外國人の批評が、必ずしも虚妄でないと信ずるのである。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味するその厭ふところは、躊躇、緩慢、首鼠兩端である。曲る事、拗れる事、邪な

嶋の爲朝　太田天洋筆

事である。叢雲の劍は、その標章としてこの上なくふさはしい。元來直の德の本領は、心の明らかに見たところに向つて直前するにある。若し右の三德を一括してこれを一體と見れば、明はその靜的方面卽ち知の方面で、直は活動方面卽ち意の方面である。知の明らかに見たところを意が直進して實現する。そして知の見方、意の働き方に、潔くて言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格と言ふべきであらう。明き心を以て「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし」。故にその明き心の示すところに從ひ、直前して父母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば「八隅知し大君」「現つ神」として國に臨み給ふ樣が限りなく高く尊い。故に直前して、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」の獻身的奉公を致すのである。そしてその君父に事へ、妻子を愛しむや、多くは水臭い思慮、分別、利害勘定の結果でなく、眞實掬すべき趣があつた。此所が眞淵、宣長等の國學者の感歎し、自負して措

(一)「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐしうつくし、云云」(萬葉集、山上憶良)

(二)「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、かへりは見はせじ」(萬葉集、大伴家持)

かなかつた點である。無論どこの國にも、文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の性向があつたであらうし、大和民族にも、利害勘定的の行爲がなかつたとは言はれないであらう。また自然眞實の行爲に弊害が伴なはないとも言はれないであらう。けれども、我が民族の特徴の一面は、とにかくこの點に存したやうに思はれる。その例は、遠い昔では、素戔嗚尊に見る事が出來る。あの日本武尊も素戔嗚尊系の勇者である。次いでは鎭西八郎爲朝の腕白、勘當、九國押領召還、保元の勇戰、大島配流の一生、これも素戔嗚尊系の大立者。これ等何れも向ふ見ずのやうでありながらも、妙に情に厚いところがあり、君父の事とあれば、水火を辭せずに直前するといふ風があつた。直、斷、決、勇の權化で、確かに大和民族固有性の一面を背負つて立つ英雄であつた。その他、蒙古來寇の時に西海の將士が身命を捨てて防戰した態度を見よ。代々の武士が、

大立者

(一)文永十一年(一九三四年)と弘安四年(一九四一年)。

(一)高橋蟲麻呂の歌。萬葉集にある。

(二)和田義盛の三男義秀。安房國朝夷郡（今、千葉縣安房郡）に成長したので朝比奈と稱した。豪勇無雙の士。

(三)山本常朝の著で俗に「鍋島論語」と稱せられる「葉隱」中にある。

一轍者　豁然大悟　利潤　金誠

千よろづの軍なりとも言擧せず
取りて來ぬべき男とぞ思ふ

といふやうな斷乎たる覺悟を見よ。重忠や清正の如く、竹を割つたやうに正直な豪傑が國民に尊崇されるのを見よ。曾我五郎や朝比奈三郎のやうな一轍者が國民に愛せられるのを見よ。豁然大悟の禪宗が盛に行はれたのを見よ。眞僞は知らないが、「正直は一旦の依怙にあらずと雖も、遂に日月の憐みを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰にあたる」といふ戒が、天照大神の御言葉として神道家に唱へられてゐた。武士には「七息思案」といふ格言があつて、「分別も久しくすればねまる。武士は物事手取早くするものぞ」といふ事が、武士道の金誠になつてゐた。これ等は何れも直を好む性質が、大和民族の心性の基本精髄をなしてゐる證據なのである。

國民修文

光明を尙ぶ精神

清原貞雄

(一)歷史家、文學博士。廣島文理科大學教授。明治十八年（一八五四五年）大分縣に生れた。

誓約　是非曲直を判斷する時、神に誓を立てて、その誓の通りの驗のあるかないかによつて神意を判ずる神事。二神は玉や劍から男女の神を化生させて、その男女の別によつて是非曲直を判斷された。

太陽神　太陽を神と考へて崇拜の對象としたもの。

公的に生活して、私的個人生活を理想としない日本國民は、自然の結果として、光明を尙ぶ精神をもつてゐる。我が國民は古來赤き心を尙ぶ國民である。公明正大で少しの暗い所もない朗かな心が「赤き心」である。「赤き心」は「明き心」であつて、丹心、赤心、清明心などの文字が當てられ、「あかくきよき心」などとも言はれてゐる。このあかき心を尙び、あかき心をもつ事が日本國民の誇である。素戔嗚尊が高天原で天照大神の爲にその心事を疑はれた時に、誓約によつてその心のあかい事が證明されたと言つて、大いに得意の樣を現された神話がある。

日本國民の信仰上の最大最高の目標は、言ふまでもなく天照大神である。天照大神は日本國民の大祖として奉戴されるのであるが、同時に太陽神として崇敬されてゐる。太陽は光明の本源である。國民信仰上に於ける最大最高の神を、光明の本源である

投影　うつつた影。

北歐神話　古代のスカンヂナビヤ（今のスウエーデン、ノールウェー、デンマーク、イスランド等を含む）に住んだ民族に傳はつた神話。

印度の神話　印度に移住したアーリヤ民族の間に發達した神話。

ところの太陽と結び附けてゐるところに、我が國民の光明を尚ぶ精神が十分に現れてゐると思ふ。我が國民が古來白色を尚んで來た事、殊に神道に於てそれが著しい事は、白の色がもつところの明るさを尚ぶのである。勿論神道に於ては、清淨を尚び、その無垢無染といふ清らかさを尚ぶところから來てゐるのでもあるが、明るさといふ事もある。否清らかさと明るさとは元々共通のものである。國民思想、國民信仰の投影とも言ふべき神話その物が、既に光明を尚ぶ精神的特色を表現してゐる。明るく朗かな氣分。――これが我が國の神話のもつ最も著しい特色であつて、他國の多くの神話に見るやうな陰慘な氣分は少しも現れてゐない。北歐神話にしても、印度の神話にしても、陰慘な物語が可なり多く含まれてゐるのであるが、我が日本の神話には、かやうな物語は殆どない。

我が國には光明と歡喜とに滿ちた高天原の神話はあるが、か

黃泉國　夜見國と同じい。暗黑の世界で死の國を指す。

常闇　永久に暗黑なこと。

さばへなす　五月の頃の蠅のやうに。

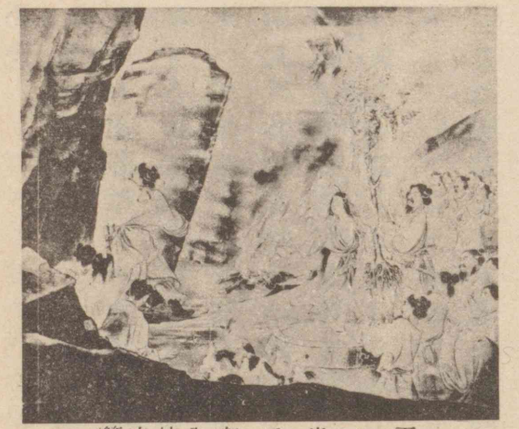
荒ぶる神　亂暴する神。

八百萬の神々　國民の祖先である無數の神。

天の安の河　彌瀨の河、即ち幾瀨もある廣い河。或は銀河と言ふ。

常世の長鳴鳥　常世は常夜（常闇に同じ）、長鳴鳥は雞のこと。

の佛教などでいふ暗黑陰慘な地獄に相當するものは認められない。死者の行くべき世界として黃泉國の物語はあるが、決して地獄物語に對比すべきものではない。光明の神天照大神が天岩戸に隱れまして、天の下が常闇になつた時には、さばへなす荒ぶる神神が所を得顏に荒びて、國民は大いに困つたのであるが、國民はかくの如き際に於ても、決して屈託したり、悲觀したり、失望落膽したりする事はなく、八百萬の神々は直ちに天の安の河原に集つて、盛に火を燎やし、黎明を象徵するところの常世の長鳴鳥を鳴かしめ、天鈿女命をして滑稽な舞踊をなさしめ、八百萬の神々の笑ふ



天の岩戸（武内桂舟筆）

世をはかなむ　世の中を定めなく思ふこと。無常を感ずること。

あへらく　あへる。

聲が高天原を搖動かしたとある。勿論これは神話物語であるが、かやうな神話物語は、光明を尙ぶ國民の精神から生れたものである。

かるが故に、國民は樂天的である。常に物を明るく見る。世をはかなむ思想は元來ない。物は見方によつて明るくも暗くも見える。すべての物を明るく見るのが日本國民の特性である。惡人はすべての事がらを惡意に解し、善人はすべての事がらを善意に解釋する。自ら明るい心持をもつてゐる者は、すべての事がらを明るく見るのである。

御民われ生けるしるしあり天地の
さかゆる時にあへらく思へば

この歌こそ、日本國民の物の見方を代表したものである。勿論一種の厭世思想の發生した事も否定する事は出來ない。しかし、それは多くは佛教の厭世的な思想の影響である。平安時代の貴

頽廢的な暗い思想　不健全で陰鬱な思想。

(一)平安時代の文學者。清原元輔の女。第六十一代一條天皇の皇后定子に仕へた。

(二)面白い季節は正月、三月、四月、五月、七月、八月、九月、十一月、十二月である。總體その季節々々につい て一年中皆面白いとの意。

(三)比叡山の東塔の本堂。當山最初の建立。國寶建造物である。

族が頽廢的な暗い思想に陷つてゐた事は、當時の物語類を見れば直ちに看取される。しかし、同時代の清少納言はその隨筆枕草紙に「(一)ころは正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべてをりにつけつゝ、ひとゝせながらをかし」と言つて、日本人特有の明るい見方をしてゐる。これが本來の日本精神なのである。

今一つ日本國民の光明を尙ぶ精神を現してゐるのは家屋である。殊に我が固有建築の典型であるとされてゐる神社建築に於てそれが著しい。概して宗教に關する建築物には陰鬱な物が多い。キリスト教會の如きは宗教的建物としては明るい方であるが、普通の我が國の家屋に比較すると、餘程陰鬱に出來てゐる。佛教の寺院建築に至つては一層それが甚だしい。就中、天台宗、眞言宗などはその極端な例である。天台宗の總本山延暦寺の根本中堂に參詣した人は何人も知つてゐる事であるが、案内者は日中でも蠟燭を點して案内する。それ程暗く出來てゐるのである。

顯著な對照　著しく對立してゐること。反對してゐること。

佛教で極樂淨土の事を一に寂光土と言ふ。寂光土は後世發達した佛教では色々むづかしい理窟を附けてゐるが、本來の意味は、幽な光の國といふ事である。光明よりも寧ろ薄暗いのを理想とする考へ方から、極樂淨土を寂光土と言つたので、天台宗や眞言宗などで佛を安置する本堂を薄暗くする所以も此所にある。

然るに神社の建築は四方明放しである。これは佛教建築と極めて顯著な對照をなしてゐる。國民が樂天的の氣分に富んで居り、物事を悲觀的に考へる事をしないといふ事と、この光明を尚ぶ精神とは、相照應するのである。或は樂天的であり、餘り氣分の明るい過ぎる日本には、深遠な哲學は生れないと云ふ者がある。これは多少理由のある言分である。

しかし、佛教の陰鬱で厭世的な思想の、遂に印度を亡してしまつた事を考へる時、吾人は日本國民が光明を尚ぶ精神をもつてゐる事を、遺憾に思つたり、卑下したりする必要は更にないと思ふ。光明を尚び、物に屈託せず、若々しさを永久に失はず、常に朗かな心持を有し、萬難を排して進んで行く勇氣を失はない間は、我が帝國の前途は洋々たるものであつて、國を護るこの精神こそ、國の寶であると言はなければならぬ。

——日本國民の精神——

前途は洋々　前途の廣いこと。

(一)思想問題に關する講演を記したもの。

二〇　那須の與一の事

さる程に阿波、讃岐に、平家に背いて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、此所の洞より、十四五騎、二十騎うち連れ〳〵馳せ來る程に、(二)判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見るところに、舟の中より、年のよはひ十八九ばかりなる女房の、柳の五つ衣に紅の袴著たるが、

(二)源義經。

尋常に飾る

柳の五つ衣

舟のせがい

矢面

てだれ

小兵

さん候

皆紅の扇の日出したるを、舟のせがいに挾み立て、陸へ向つてぞ招きける。

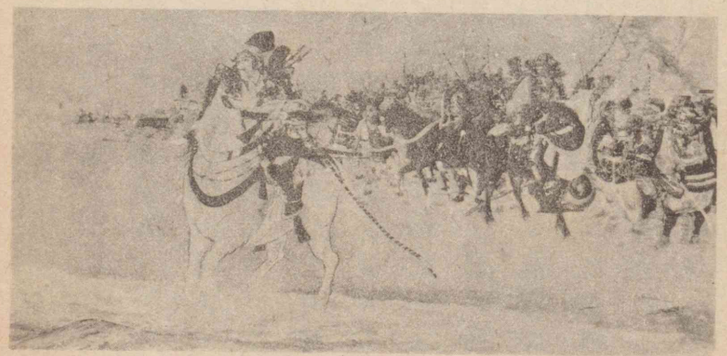
判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに」と宣へば、「射よとにこそ候らめ。但し大將軍の矢面に進んで、けいせいを御覽ぜられん所を、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん」と申しければ、判官「身方に射つべき仁は誰かある」と問ひ給へば、「てだれども多う候なかに、下野國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども、手はきいて候」と申す。判官「證據があるか」「さん候。かけ

扇の的

きりふの矢

鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候」と申しければ、判官「さらば與一呼べ」とて召されけり。

與一その頃は未だ二十許の男なり。褐に赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂に、もよぎをどしの鎧著て、あしじろの太刀をはき、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合せてはいだりけるぬための鏑をぞ差添へたる。重籐の弓脇に挾み、冑をば脱いで高紐に掛け、判官の御前に畏まる。判官「いかに與一、あの扇の眞中射て、かたきに見物せさせよかし」と宣へば、與一「つ



（尾形月三筆）

御諚

矢ごろ

かまつるとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢のきずにて候べし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも子細を存ぜん人々は、これより疾う〳〵鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はばはづれんをば存じ候はず。御諚で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて御前を罷り立ち、黑き馬の太う逞しきにまろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、弓取直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方のつはものども、與一が後を遙かに見送つて、「この若者一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。

矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段許うち入つたりけれども、

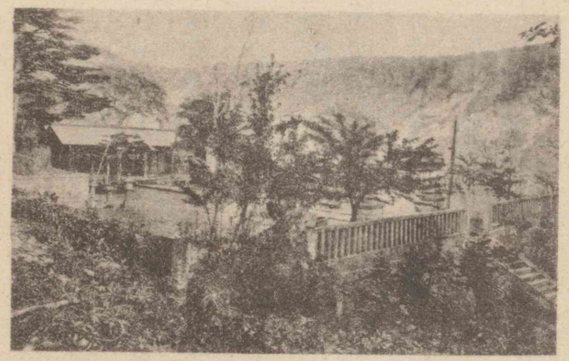
(一)壽永四年。(一八四五年)

くしに定まらず

くつばみ

神明

なほ扇のあはひは七段許もあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻許の事なるに、をりふし北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげ、ゆりすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。何れも何れも、はれならずといふ事なし。與一目をふさいで、「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切折り自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、こ



那須溫泉神社

よつぴいてひようと放つ　十二束三ぶせ

えびら（箙）

（一）江戸幕府の臣。官名は直清。江戸の人。享保十九年（一七三四年）歿、七十七。

の矢はづさせ給ふな」と心のうちに祈念して目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつぴいてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑は浦響く程に長なりして、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみもまれて、海にさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出いたるが、夕日に輝くに、白波の上に漂ひ浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家ふなばたをたゝいて感じたり。陸には源氏えびらをたゝいてどよめきけり。

―平家物語―

二一　仁は心のいのち

室鳩巣

心に仁あるは、人に元氣あるが如し。人の元氣は脈に現れ、心の元氣は愛に現る。脈の通ひ絶ゆれば人死する如く、愛の理滅ぶれば心

齒德遜讓

死する程に、仁は心のいのちとも申すべし。それ心は活物なるにより、人に情あり、ものの哀れを知りて、常に活きたるものぞかし。より て、父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒德を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずる事を知り、不義を聞いては必ず恥づる事を知る。若し情なく哀れを知らずば、その心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなん。何をもて自愛し、何をもて恭敬せん。義を聞いて感ずる事なく、不義を聞いても恥づる事なかるべし。是をもて言ふに、仁義禮智何れも心の德にして、各その理わかるれども、その本源は仁に外ならず。人として不仁ならば、義も、禮も、智もその樣ありその用ありといへど、所詮内より生ぜねば、眞の德にあらず。公の理にあらず。この故に仁に心の德と言ひて、外に德を言はず。仁に愛の理と言ひて、外に理を言はず。その言

はざるところに深き意ありと知るべし。

それに就きて、一つの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主天德寺、豪健の勇將なりしが、ある時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聽きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師に言ひけるは、「某は唯哀れなる事を聽きたくこそあれ。その心得して語り候へ。」と言へば、法師「心得候」とて、佐佐木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天德寺哀れがりて、雨しづくと泣きけり。さて「今一曲前の如く哀れなる事を聽きたし」と言へば、那須の與一宗高が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天德寺また落涙數行に及べり。後日に家臣のやからに、「過ぎし日の平家はいかゞ聽きつる」と言ふに、家臣ども「最も面白き事にて候。但し我等ども一つ心得ぬ事こそ候へ。前後二曲共に勇烈なる事にて、哀れなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかゞの事にて候にや、今に不審なる事に何れも申し合ひ候」と言へば、天德寺驚きて、「只今までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さて〳〵力を落して候。先づ佐佐木が先陣をよく合點して見られ候へ。賴朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ池月を高綱に賜はるにあらずやさればそのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじと、賴朝に暇乞して出でける、その志を察してみられよ。哀れならぬ事かは」とて、しば〳〵涙を拭ひつゝ、暫しありて言ひけるは、「また那須の與一も大勢の中より選ばれて、唯一騎陣頭に出でしより、馬を海中へ乘入れて的に向ふに至るまで、源平兩家

(一)豐臣時代の武將佐野了伯。慶長六年(一六一一年)歿、年四十四。

雨しづくと泣く

合點する

天德寺平語を聽く
(小堀鞆音筆)

武邊

迷惑す

鳴りを靜めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名をれたるべし、馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる心を察してみられ候へ。武士の道程哀れなるものは候はず某は毎に戰場に臨みては、高綱、宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聽く時も兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに各には哀れになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は唯一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにてはたのもしからずこそ候へ。と言ひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。

これ天德寺が武邊は涙より出づれば、固より仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲の事にて手荒き道なれば、言はゞ仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは眞の武にあらず。況やその餘の

忍びざるの心

(一)思想家。明治八年(二五三五年)新潟縣に生れた。想的商業、一理休和倚廣長舌、店頭禪等の著がある。

赤誠横溢し眞情流露す

事は、なほもて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、內より油然として潤ひわたりて發するにあらざれば、眞のものにあらず。これ卽ち前に言ひし人に情あり、ものの哀れを知るの心なり。すべて諸の言行共に、義理に當りては悉く忍びざるの心より出でて、天德寺が涙こぼすやうだにあらば、これ心德の全きなり。仁者と言はんに何の疑かあるべき。

——駿臺雜話——

二二　國威八紘に振ふ

高島米峯(一)

我等は若い

青年は人生の花である。されど、唯若くして美しきが故に貴いのではない。希望に生き、意氣に燃えるが故に貴いのである。奉公の赤誠横溢し純潔の眞情流露するが故に貴いのである。

既に花である。花ではあるが、僅かに槿花一朝の榮を誇つて、一夜

槿花一朝の榮

芙蓉八朶の峯

(一)朱熹の「偶成」の詩句による。全詩は「少年老い易く學成り難し。一寸の光陰輕んずべからず。夫れ覺めず池塘春草の夢。階前の梧葉已に秋聲。」

の嵐に忽ち凋落するやうな花であつてはならない。その前途には、必然の任務たる結實といふ大業が待構へてをる事を忘れてはならない。卽ち、青年はこの大業を成就する爲の準備時代であり、榮養吸收時代であり、身心鍛錬時代であり、人格陶冶時代である。この時代の努力奮闘が大なれば大なるだけ、その結實もまた大なるを得るのである。

我等は若い。しかし、いつまでも若くてはゐない。(一)池塘春草の夢がまだ覺めないのに、早くも已に秋聲階前の梧葉に訪るゝの歎なきを得ない。この時に當り、あゝ吾老いたりと歎いても、誰も相手になつてはくれまい。古句に曰く、

飛びこんだ力で浮ぶ蛙かな

人生の一樂

海拔一萬二千四百六十尺、芙蓉八朶の峯、一たびこれを仰ぎ見る

(一)論語學而篇に見える語。

時、何人かその秀靈の氣に打たれない者があらう。

翻つて思ふに、この一萬二千尺の靈峯も、若しそれ三國に亙れる廣大な裾野を無視せんか、到底その存立を可能ならしめる事は出來ない。然り、富士山あつての裾野でなくして、裾野あつての富士山である。

自ら偉大となる、もとより良し。時に或は他をして偉大ならしめるのも、また不可とはしない。いはゆる裾野的役割の如き、實に大役である。大役にしてしかも認められず酬いられざる裾野的役割に甘んずる者があつてこそ、偉大な人物を世に送り出す事が出來るのである。

孔夫子曰く、(一)「人知らずして慍らず、また君子ならずや」と、敢へて人に知られん事を思はず、敢へて世の酬を受けん事を欲せず、唯爲すべきを爲し、行ふべきを行ひ、これを以て人生の一樂と觀ずる事を

大道長安に通ず

得ば、以て君子と稱すべく、以て達人と呼ぶべきではないか。

裾野か。山か。その境に於て尊卑もなければ、また上下もない。各人その能くするところに從つて選ばんか、蓋し「大道は長安に通ぜん」。

國民の富は國家の富

極天極地、永遠無窮に榮え行くべき運命にあるもの、卽ちこれ、嚴乎悠久の歷史を有する日本の大帝國である。されど、何の力か能くこの運命の扉を開いて、國家を興隆せしめるであらう。

看よ、かの巍然として中空に聳える山を。(一)その高きは敢へて土壤を讓らざるが爲ではないか。また看よ、かの汪洋として大海に朝する河を。その深きは敢へて細流を選ばざるが爲ではないか。卽ち知る、宇宙の厖大も一介の集積に過ぎない事を。

國民の富は國家の富である。國民が悉く富んだ時、國家が興隆せざらんと欲しても得べからざるのである。而して此所に達する方

(一)李斯の上書に見える「泰山は土壤を讓らず、故に能く其の大を成す。河海は細流を擇ばず、故に能く其の深を就す。」による。

途に至つては、唯勤と儉とあるのみである。言葉こそ陳套のやうであるが、しかもその意は永久に清新である。

國威八紘に振ふ

今より千三四百年前の世界を看よ。西洋にはイギリスなく、ドイツなく、フランスなく、アメリカもなかつた。强ひて求めて、ローマ法王だけが特殊の光を放つてゐたといふに過ぎないくらゐの有樣ではなかつたか。これに反して東洋には、西方アジヤにマホメットの蹶起があり、中央アジヤに佛教文化の進展があり、支那は文化の極盛を誇る隋代であり、三韓また支那文化の輸入同化に力を致して、頗る見るべきものがあつた。一言にしてこれを言へば、世界は東洋文化の世界であつた。殊に日本に至つては、時恰も推古天皇の御代で、隋と對等の國交を修めて文物燦然、日出づる處の尊貴を、中外に宣揚してゐたのである。

然るに千三四百年後の現代に於ては、東洋の天地は全く歐米文明の爲に征服し盡されたかの觀がないでもない。しかし、そのいはゆる西洋文明の生命もまた、必ずしも永い將來があらうとは思はれない。その後に來るべきものは、卽ち東西文明の融合調和の上に築き上げられた新文化でなければならない。さうしてその使命は、當然東西文化合流の十字路に立つてゐる我が日本が負はねばならぬ責務であつて、これを果す事によつて、帝國の國光は推古天皇時代のそれに增して輝くのである。

曩に友邦滿洲國の獨立に次いで日本の國際聯盟脫退があり、最近極東の風雲殊に甚だ急にして、世界列國の關心は悉く我が進退に集つてゐる。曾ては支那と對等なる國交を得て滿足したに過ぎなかつた我が日本は、今は寧ろその先進國として、はたまた彼の誠實なる友邦として、無限の信賴を捧げしめ、よつて以て新文化建設の助力者たらしめなければならない。かくの如くして始めて、これを內にしては百姓昭明、これを外にしては萬邦協和、國威八紘に振つて、瑞を稱し祥を稱せざる者なきに至るであらう。

附錄

帝國實業讀本 改制新版 卷六 終

一　敬讓語（口語）
一　敬讓の意を含む文語動詞
一　國語假名遣一覽

敬讓語（口語）

一　名詞

（甲）お年　お顏　お宅　お歸り　お休み　おいくつ
おいくたり　お一つ　お十一　御返事　御挨拶
御機嫌　御本
（乙）神さま　井上さん　太郎君
（丙）お母さま　お弟さん　御尊父さま

二　人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし わたし	あなたさま あなた	この（お）かた その（お）かた あの（お）かた	どの（お）かた どなたさま どなた

三　動詞

（甲）本來の敬讓語〔○印は連語を示した〕
あがる・召しあがる（食フ、飲ム）
あそばす・なさる（爲ル）
いらっしやる（來ル、行ク、居ル）
おっしやる（言フ）
おぼしめす（思フ、考ヘル）
くださる（與ヘル）
見える（來ル、居ル）
めす（呼ブ、着ル、穿ク、乘ル、買フ）
〔以上、尊敬の意を含むもの〕
○お出でになる、お出でなさる（來ル、行ク、居ル）
あがる、參上する（訪ネル、行ク）
あげる、さしあげる（與ヘル）
いたす、つかまつる（爲ル）
いただく、頂戴する（貰フ、食フ、飲ム）
うかがふ（聞ク、訪ネル）
ございます（居ル、有ル）
存ずる、存じ上げる（知ル）

たべる（食フ）
申す、申上げる（言フ）
まゐる（行ク、來ル）
拜見する（見ル）　拜借する（借リル）
拜讀する（讀ム）　拜聽する（聞ク）
○お目にかかる（面會スル）　お目にかける
御覽に入れる（見セル）（以上、（へり下る意、丁寧の意を表すもの）

（乙）敬讓動詞のつくり方〔○印は連語を示した〕

お歌ひ
遊ばす
なさる
下さる
に、なる

御苦勞
遊ばす
なさる
下さる
に、なる

○見て下さる、讀んで下さる（以上、尊敬の意を含むもの）

お居け
申す
申上げる
致す

お供
申す
申上げる
致す

○お居けする、お供する（以上、（へり下る意のもの）

（丙）尊敬の意の添へ方（助動詞「れる」「られる」を附ける）
父は英書も讀まれる。
今日は佐藤君も來られる

（丁）丁寧の意の添へ方（助動詞「ます」を附ける）
先生も仰つしやいます。
私からも申上げます。
先生もお歌ひになります。
私もお供致します。
紙が飛びます。

四　形容詞

（甲）「お」を附ける。
こんなにお暑いのに……。

お恥しい次第ですが……。

（乙）「です」「ございます」を附ける。
これは古い（の）です。
これは新しうございます。
それはお高い（の）です。
それはお珍しうございます。

五　形容動詞（「お」「ご」を附ける）

それはお珍しからう。
若しお寒かつたら……。
あそこはお靜かでせう。
あそこはお靜かでしたか。
そんなにご丈夫なら、もう安心ですね。
ご丁寧な御挨拶で痛み入ります。

六　副詞

おまめにお働きなさいますね。
ごゆつくりなさいまし。
ここはお靜かではございません。

七　「で、ある」「だ」の意

助動詞「です」、連語「でございます」などを用ひる。
あれは學校です。
あれは學校で　ございます。
あのかたは先生で　いらつしやいます。
大將はその時、少將で　お出でになつた。

敬讓の意を含む文語動詞

（甲）

尊敬の意を含む語

あそばす（爲ル）
います、ます、まします（アル、居ル、行ク、來ル）
おはす、おはします（同前）
おほす（言フ、言ヒツケル）
おぼす、おぼしめす（思フ）
きこしめす（聞ク、飲ム、食フ）
しろしめす（知ル、統べ治メル）
たてまつる（著ル、乘ル）
たまふ、たぶ（與ヘル）
のたまふ（言フ）
まゐる（飲ム、食フ、著ル）
みそなはす（見ル）
めす（飲ム、食フ、著ル、乘ル）
わたる（アル、居ル）

（乙）

へり下る意、丁寧の意を含むもの

いたす、つかまつる（爲ル）
うけたまはる（聞ク、承諾スル）
さふらふ（アル、居ル）
きこゆ、まうす（言フ）
たてまつる、まゐらす（與ヘル）
たまはる（貰フ、受ケル）
はべり（アル、居ル）
まかる（退ク、歸ル、行ク）
まゐる（行ク）

國語假名遣一覽

わ（は）

わ（輪）
くち**わ**（口輪―轡）
お**ほわ**（大輪）
お**もわ**（面輪）
は**にわ**（埴輪）

わ（廊）
くる**わ**（廊）

わ（曲）
うら**わ**（浦曲）
いそ**わ**（磯曲）

あわ（沫）
あ**わ**もり（泡盛）
みな**わ**（水沫）

わけ（分）
いひ**わけ**（言分）
こと**わけ**（辭分）
おひ**わけ**（追分）
の**わ**き（野分）
わけがら（譯柄）
ひき**わけ**（引分）

わた（綿）

わた（腸）
はら**わた**（腸）
この**わた**（海鼠腸）

こわ（聲）
こ**わ**いろ（聲色）
こ**わ**ね（聲音）
こ**わ**づかひ（聲遣）
こ**わ**づくろひ（聲づくろひ）
こ**わ**だか（聲高）

わざ（業）
し**わ**ざ（仕業）
こと**わ**ざ（言業―諺）

わり（割）
こと**わ**り（事割―理）

し**わ**（皺）
ひ**わ**（鵝）
た**わ**ら（俵）
い**わ**し（鰯）
あ**わ**つ（周章）
た**わ**し（束藁子）
く**わ**ね（慈姑）
た**わ**やか（嬋娟）
た**わ**やめ（手弱女）
た**わ**む（撓む）

よ**わ**し（弱し）
か**わ**く（乾く）
さ**わ**ぐ（騷ぐ）
す**わ**る（坐る）
あ**わ**たゞし（惶し）
さ**わ**やか（爽か）
た**わ**いなし

語の中や下に來る「わ」は右に擧げた他は「は」を用ひる。例へば

川澤　栗瓦　雞庭
桑諏訪　安房　永久　繩
障廻る　變る　かはいらし等

ゐ（い）

ゐ（井）
ゐど（井戸）
ゐげた（井桁）
ゐぜき（井堰）
ゐづつ（井筒）
ゐくひ（井杭）

ゐで（井手―堰）
ゐなか（井中―田舍、田園）
ゐもり（井守―蠑螈、蝘）

ゐ（居）
ゐざり（居去―膝行）
かも**ゐ**（鴨居）
しき**ゐ**（敷居―閾）
くも**ゐ**（雲居）
くら**ゐ**（座居―位）
との**ゐ**（殿居―宿直）
まと**ゐ**（圓居）
もと**ゐ**（本居―基）
まゐる（目居る―參る、詣る）

ゐ猪（**ゐのしゝ**）
ゐのこ（亥の子―豚）
ゐくび（猪首）
いぬ**ゐ**（戌亥―乾）
ゐ（亥）

ゐる（率）
ひき**ゐ**る（引率る―率る、將る）
もち**ゐ**る（持率る―用、以）

ゐ（藺）
お**ほゐ**（大藺）
ゐぐさ（藺草）

あゐ（藍）
くれのあゐ（呉の藍—紅）
なゐ（地震）
うなゐ（髫髪）
かたゐ（乞食）
くわゐ（慈姑）
あぢさゐ（紫陽花）
ゐろり（爐）
ゐや（禮）
「ゐ」の假名をつかふ語は右に掲げたもので、その他、上に來る「い」の音は「い」を用ひる。例へば
今　糸　石　岩　池　犬
急ぐ　怒る　頂く　往ぬる
訝る　いたはる等

い音便
さいたま（埼玉）
さいはい（幸）
きさい（后）
ついたち（月立—朔）
ついたて（衝立）
やいば（燒刃—刃）
かい（搖—櫂）
かうがい（髮搔—笄）
たいまつ（燒松—松明）
ついぢ（築地）
かいしろ（垣代）
かいぞへ（介添）

さいて（喚いて）
といて（解いて）
ついで（次いで—序）
ついばむ（啄む）

加音
しいか（詩歌）
しいじ（四時）
むいか（六日）
語の中や下に來る「い」は右のものだけで、その他は「ひ」を用ひる。例へば
鯛　貝　鯉　笈　鸂鶒　鶯
舞　謠　假令　小し　問ひ
疑ひ　買ひ　思ひ等

う（ふ）

う音便
あきうど（商人）
いもうと（妹人—妹）
おとうと（乙人—弟）
なかうど（仲人—媒酌）
くろうと（黑人—玄人）
しろうと（白人—素人）
かうし（格子）
かうべ（神戸）
こうぢ（小路）
てうず（手水）
かうぶり（冠）
たうげ（手向—峠）

ひうが（日向）
こうや（紺屋）
はうき（箒）
かうち（河内）
ひやうし（拍子）
まうで（詣で）
たかう（高う）
ならうて（習うて）
おもうて（思うて）
とうて（問うて）
かたじけなうす（辱うす）
まうす（申す）

加音
やうか（八日）
まうく（設く）
やうやう（稍、漸）
にようばう（女房）
ふうふ（夫婦）
語の中や下に來る「う」は右の様な場合で、この他は「ふ」を用ひる。例へば
食ふ　言ふ　思ふ　購ふ
補ふ　償ふ　仰ぐ等

ゑ（え）

ゑ（繪）
ゑま（繪馬）
ゑのぐ（繪の具）
ゑがく（畫く—描く）
ゑどる（彩る）

ともゑ（巴）
ゑる（彫る）
ゑぐる（剜る）
ゑむ（笑む）
ゑがほ（笑顏）
ゑくぼ（靨）
ゑつぼ（笑壺）
ゑむ（喚む）

ゑ（餌）
ゑさ（餌）
ゑぶくろ（餌袋）
ゑばこ（餌箱）
ゑぼうし（烏帽子）
ゑんじゆ（槐）
こゑ（聲）
つゑ（杖）
つくゑ（机、几）
ゆゑ（故）
ゆゑん（所以）
すゑ（据ゑ）
すゑぜん（据膳）
すゑふろ（据風呂）
すゑもの（陶器）
すゑひろ（末廣）
こづゑ（梢）
うゑ（餓）
うゑじに（餓死）
うゑ（植）
うゑき（植木）

うゑこみ（植込）
えぐし（欷し）
上中下に來る「ゑ」は右の場合だけでこの他、上に來る「え」の音は「え」を用ひる。例へば
蝦　枝　箙　榎　蝦夷、夷
選ぶ　襟　似而非　得物等

え（兄）
きのえ（木の兄—甲）
ひのえ（火の兄—丙）
つちのえ（土の兄—戊）
かのえ（金の兄—庚）
みづのえ（水の兄—壬）

え（枝）
しづえ（下枝）
すはえ（條）

え（江）
いりえ（入江）

ふえ（笛）
ぬえ（鵺）
はえ（鯰）
ひえ（稗）
さゝえ（蠑螈）
ながえ（轅）
え（柄）
こえ（肥）
やまごえ（山越）
みえ（見え）
はえ（生え）

いえ（癒え）
あまえる（甘える）
おびえる（脅える）
おぼえる（覺える）
さえる（冴える）
たえる（絶える）
ふえる（殖える）
中下に來る「え」は右の場合でこの他は「へ」を用ひる。例へば
家　苗　膚　楓　蛙　歸る
孵る　喘ぐ　敢へて　剩へ
堪へる　悶へる等

を（お・ほ・ふ）

を（男）
をとこ（男）
をのこ（男）
をつと（夫）
ますらを（丈夫）
みやびを（風流男）
さつを（獵夫）
をひ（甥）
をゝし（雄々し）
をす（牡）
さをしか（小牡鹿）
めをと（夫婦）
を（緒）

をとし（緒通し—緘）
たまのを（玉の緒）
はなを（鼻緒）
ほぞのを（臍帶）

を（小）
をぢ（伯父、叔父）
をば（伯母、叔母）
をば（小母）
をす（小簾）
をがは（小川）
をみごろも（小忌衣）
をぐな（童男）
をとめ（少女）
をんな（女）
をなご（女子）
をみなへし（女郎花）
をぎ（荻）

を（尾）
をばな（尾花）
みを（水脈）
みをつくし（澪標）
とを（十）
をろち（大蛇）

を（麻）
をだまき（苧環）
をだまき（緒環）
をから（麻幹）
をけ（苧笥—桶）
をさ（箴）

を（岑）
をの（尾の上—岑上）
をか（岡—丘、陵）
をかぼ（陸稻）

をさ（長）
むらをさ（村長）
ふなをさ（船長）
しでのたをさ（死出田長）
をさなし（幼、稚）
をさをさ（大抵）

をち（遠）
をちこち（遠近）
をととひ（一昨日）
をととし（一昨年）

をる（折）
たをを（手折る）
をしき（折敷）
つゞらをり（九十九折）
しをり（栞）
しをる（萎る）

をこ（愚）
をこがまし
をこぜ（臘）
をを（唯）
かはをそ（獺）
をしどり（鴛鴦）
をの（斧）
をり（檻）
をしね（晩稻）
あを（青）
いさを（功）

いさをし（績—勳）
ばせを（芭蕉）
みさを（操）
やをら（徐）
たをやか（嬋娟）
たをやめ（手弱女）
をとり（囮）
をかす（犯す）
をがむ（拜む）
をどす（威す）
をす（食す）
をさむ（治む）
をさむ（納む）
をさむ（藏む）
をしむ（惜しむ）
をしふ（教ふ）
をふ（終ふ）
をはる（終る）
をめく（叫く）
をのく（戰く）
をどる（踊る—躍、踴）
をる（居る）
かをる（香る—薫）
あをむく（仰く）
まをす（申す）
しをる（撓る）
をかし（可笑し）
をし（愛し—惜）
くちをし（口惜）
をさなし（幼し）

さを（竿）
つりざを（釣竿）
みさを（水竿—棹）
うを（魚）
いを（魚）
ひを（氷魚）
しらを（白魚）
いをのめ（魚の目—眈）
かつを（鰹）

右の外、上には「お」を用ひ、中下には「ほ」を用ひる。例へば
親　沖　弟鬼　祖父　鷲
く　遲く　恐し等
顏　鹽　潮　火の穗（焰）
氷　郡　蟋蟀　透る　滯る
直し　遠し　通す等

中下に「ふ」を用ひ、文語では轉呼音で「お」と發音するものがある。例へば
問ふ　思ふ　買ふ　添ふ
願ふ　貰ふ　拾ふ　習ふ
訪ふ　沿ふ　乞ふ　扱ふ
害ふ　違ふ　誘ふ　纏ふ
事ふ　拂ふ　叶ふ　憂ふ

候ふ　扇ぎ　仰ぐ　葵　樗
近江　今日　昨日　倒る　貴
し　尊ぶ等

ぢ（じ）

ち（父）
おほぢ（祖父）
をぢ（伯父—叔父）
ぢぢ（祖父）
ぢぢ（老翁）
ぢぢむさし
をぢ（小父）
すぢ（筋）
うぢ（氏）
ぢ（路）
こうぢ（小路）
ひぢ（肘）
あぢ（味）
あぢ（鰺）
かぢ（梶）
かぢ（楮）
かぢ（鍛冶）
ひぢ（泥）
ふぢ（藤）
ふぢばかま（藤袴）
かうぢ（麴）
くぢら（鯨）
ことぢ（琴柱）

ねぢ（鋲）
わらぢ（草鞋）
なんぢ（汝）
なめくぢ（蛞蝓）
もみぢ（紅葉）
はぢ（耻）
ふぢな（蒲公英）
あぢさゐ（紫陽花）
みそぢ（三十）
よそぢ（四十）
いそぢ（五十）
むそぢ（六十）
かぢめ（搗布）
ちぢむ（縮む）
ねぢる（捻る）
とぢる（閉ぢる）
とぢる（綴ぢる）
はぢる（耻ぢる）
よぢる（攀ぢる）
ひぢる（濡ぢる—泥）
もぢる（捩ぢる）
ねぢける（佞る）
あぢはふ（味ふ）

「ぢ」を用ひるのは右の語だけで、他は「じ」を用ひる。例へば
虹　雉　籤　躑躅　交る
詰る　辱し　著し等

ず（づ）

かず（數）
きず（傷）
くず（葛）
はず（筈）
ゆはず（弭）
もず（鵙—百舌鳥）
みゝず（蚯蚓）
はずみ（機）
ねずみ（鼠）
あんず（杏）
すず（鈴）
すず（錫）
すずむし（鈴蟲）
すずき（鱸）
すずな（菘）
すずしろ（大根）
すずめ（雀）
すずし（生絹）
すずろ（漫）
ずず（數珠）
ずさ（從者）
ずはえ（條）
いしずゑ（礎）
くず（國栖）
こずえ（梢）
かならず（必ず）
たたずむ（佇む）

なずらふ（準ふ）
ひずむ（歪む）
すずし（涼し）
すずり（硯）
まず（交ず—混）
ゆず（柚子）

右の他は「づ」を用ひる。例へば
水　屑　泉　雷　酸漿　渦
煩ふ　貧し　續く　かゝず
らふ等

昭和七年一月一日印刷
昭和七年一月三日發行
昭和八年七月二十日訂正再版發行
昭和十一年九月十二日訂正三版印刷
昭和十一年九月十五日訂正三版發行
昭和十二年三月二十日訂正四版印刷
昭和十二年三月廿三日訂正四版發行
昭和十二年七月十日訂正五版印刷
昭和十二年七月十三日訂正五版發行
昭和十二年十二月十八日訂正六版印刷
昭和十二年十二月二十一日訂正六版發行

帝國實業讀本 改制新版

編者 芳賀矢一
訂補者 上田萬年
同 長谷川福平

發行者 合資會社 冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地

代表者 坂本守正

印刷所 精版印刷株式會社
大阪市西淀川區海老江上四丁目二十三番地

定價
卷一—卷六 金六拾錢
卷七・卷八 金五拾四錢
卷九・卷十 金五拾壹錢

發行所 合資會社 冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田二一七一—二一七八番振替口座東京五〇一番

HAGA 檢査

千早ぶる
神の時代より
日の本の
國のはじめと
宣ひしこの山

三毛 栗栖晴